

高鍋町の文化財第三集

高鍋の無形民俗文化財

— 神楽・棒踊・盆踊 —



高鍋町教育委員会



6番 鬼神舞



7番 将軍舞



9 番 節 舞



11 番 盤 石



11番 盤石舞面



29番 手力雄舞



30番 戸開雄舞



鳴野棒踊



鳴野棒踊



鳴野棒踊



盆 踊



盆 踊

□ 高鍋神楽

は し が き

日向高鍋の郷土芸能「高鍋神楽」は昭和四四年四月一日、宮崎県指定の、無形文化財となった。その後は、「高鍋神楽保存会」の固い組織の中に、ここ数年来すばらしい復興と盛況、発展を見るようになった。

うわさの高い、高千穂神楽・銀鏡神楽とともにその優秀さをほこるもので、かぐら姿・服装・動作も清楚で、高尚優美であり、勇壮活発で古風さながらのゆかしさが保たれている。

毎年木城・川南・新富・高鍋・各町神社で回わり順番に、奉納され、夜を明かして「三三番」の神楽が舞われ、昔さながらの姿で伝承されている。

目次

□ 高鍋神楽	
はしがき	
1. 由来	1
2. 変遷	1
3. 現況	2
(1) 高鍋神楽保存会	
(2) 実施方法	
4. 実施内容	5
5. 参考	15
(1) 宮崎県内神楽の概要	
(2) 宮崎県内神楽の形態	
(3) 宮崎県内主要神楽番付名称表	
6. むすび	19

□ 鳴野の棒踊

1. はじめに	21
2. 棒踊の由来	21
(1) 伝説	
(2) 森栄氏談	
3. 変遷	22
4. 現状	22
(1) 保存団体	
(2) 実施時期	
(3) 祭宿	
(4) 当日の準備	
5. 実施の内容	24
(1) 実施の際の器具及び衣装	
(2) 踊組の編成	
(3) 踊日の経過	
(4) 舞踊の形式	
(5) 棒踊唄	
6. むすび	27

□ 高鍋の盆踊音頭

1.	古記録に見られる高鍋踊	29
2.	盆踊の趣旨及び主催者	29
3.	盆踊の日と場所	30
4.	盆踊音頭	31
5.	音頭の作者と伝誦者	31

□ 高鍋盆踊音頭集

1.	那須与一	32
2.	富吉音頭	33
3.	炭焼小五郎	34
4.	おしおかめまつ	35
5.	いろは口説	37
6.	おどまりおさよ	37
7.	平佐くどき	39
8.	お民半蔵	40
9.	おいろ十郎	42
10.	鈴木主水	43

11.	附 高鍋町蚊口浦鵜戸神宮祭礼木遣り	48
	むすび	46

1 由 来

この神楽の起原は明らかではないが、口碑や神社の遺物などから推定すると遠く平安朝時代から舞われていたものと思われる。高鍋地方には比木神社のお里回りという神事が昔から行われているが、また別に東白杵郡南郷町神門鎮座の神門神社への御神幸も毎年嚴重に続けられており、この際は高鍋神楽が奉納される習わしである。神門神社の祭神は比木神社に合祀の祭神福智王の父禎嘉王といわれており、遠く養老二年（七一八）創建の古社と伝えられているが、この境内の神木にその昔神楽奉納の際射込まれた鎌やぐらが現われたことがあり、それはことごとく鎌倉時代以前のものであったといわれている。高鍋神楽はこの比木神社、神門神社を中心として発祥したのかと思われる。後年秋月氏が高鍋に封ぜられてからは比木神社を崇敬し、藩祭として「大神事」が行われる様になりこの神事は引続き現在に及んでいる。即ち高鍋町鎮座の八坂神社、愛宕神社、木城町の比木神社、川南町の白髭神社、平田神社、新富町三納代の八幡神社の六社において、毎年一回旧暦一二月一日に三三番の神楽が奉納される。これは六社が順番に受持ち六年毎に当番となるものであるが、比木神社ではこれとは別に新暦一二

月五日に三三番の神楽が毎年奉納されている。

2 変 遷

数百年にわたる古い伝統の歴史をもつ高鍋神楽（比木神楽ともいう）は永い間郷土民の中に生きている。

大正六年には、伊勢神宮奉納神楽に榮譽ある参加をしたことによりその評価も高く急に有名となった。

しかしその後、時代の流れはかわり、特に戦後は敬神の心もうすれ、神楽も壊滅の状態となり、これを憂うる人々の尽力により、保存活動組織が昭和三〇年頃から起り、高鍋・木城・川南・都農四町村の神職有志をもって結成され、その後度々の研究討議が重ねられ現在の「高鍋神楽保存会」となった。

その間昭和四一年一月一九日に福岡市民会館大ホールで、九州各県教育委員会主催第八回民俗芸能大会に出演大好評をうけた。尚なほ四一年一二月に宮崎市公会堂で、宮崎県民俗芸能第四回大会に特色ある神楽を出演、昭和四四年四月一日付で県指定無形文化財として「高鍋神楽」が認められ、多年にわたる苦勞が実を結び、郷土民関係者一同の喜びはまことに感慨深いものがある。

何事も復興事業の容易なことではないことがわかる。

「日向高鍋神楽番附及縁起」大正六年三月、発刊、浦幸次郎氏の記を次に記し参考にする。

「日向高鍋の各神社に奉納する所の神楽は其の創始何れの時代なるか之を知るに文献の以て徴するものなしと雖も、その坐作進退等の舞様高尚優美勇壯活発如何にも神々しく観る者をしておのずから敬神の念を発せしむるに足る。是れ旧藩主秋月公の特に奨励せられし所以にして、神楽道具の如き凡てその賜ふ所たり。而して其演奏者たる祝人なるものは、何れも藩祭若くは村祭の神社、又は各個人の氏神に奉仕し、以つて相当の報酬と、上り神楽の謝儀を得、一家を經營したるものなるも、廃藩置県後の更に神職を置き神事を掌しめたと、人情澆季となり、従つて教神の念亦漸く薄く、神社に参拝し神楽の演奏を観覧するもの減少したる等の為め、演奏者も自ら技芸の講習を怠り、或はその子孫にして、神楽方たるを恥ぢこれが講習を為さず、終に衰滅を来さんとするの虞れあり。依て神楽保存会なるものを設け、併せて神楽縁起を印行し、一般敬神の念を厚くせしめんことを図ると共に、旧藩公歴代の遺志に酬ふる所あらんと欲す。」

3 現 況

(1) 高鍋神楽保存会

戦前より非公式に保存活動をしていたが公的に保存会を組織し活動を開始したのは昭和三〇年頃からで、当時は高鍋町助役であつた尾崎一男氏を会長とし、高鍋・木城・川南・都農の四町村の神職で結成されたのがはじまりで、

○神楽の保存と研究

○町民への広報

○若手後継者の養成

などの目標を掲げ努力するかたわら、文化財指定運動を開始した。

歴代会長は、尾崎一男、岩切秋雄・河野光雄

神代勝忠・長友俊明・日高竹夫

鶴田国利・岩村一郎

長友俊明（昭和五一年）

経費予算については、会費と補助金負担金等が主な財源となる。会費一人一〇〇〇円、補助金は県より若干円。各町の負担金は、均等割二五〇〇〇円、人口割は一戸につき、三円六〇銭で予算化して運営している。

会の主な事業

一 高鍋神楽保存顕彰
二 衣裳、用具の整備保存
三 後継者の育成
四 研究と実技講習

以上会則に基づき事務局で実施にあたり「かぐら」保存の目的の役割を果たしている。現在毎年各町神社回り番の大神事は盛況をきわめている。特に比木神社は毎年一二月五日に実施している。

高鍋神楽保存会々則

第一条 本会の名称は高鍋神楽保存会という。

第二条 本会の事務所は高鍋町教育委員会におく。

第三条 本会は高鍋神楽の保存顕彰を目的とする。

第四条 本会は第三条の目的達成のため左記の事業を行う。

- 1 神楽講習会 研修会
- 2 保存のための調査研究並びに記録作成
- 3 その他目的達成のための事業

第五条 本会は東児湯各町の神社総代及び神職並びにこの趣旨に賛同する者を以て組織する。

第六条 本会に次の役員をおく。

役員	役員
会長	一名
副会長	二名
監事	二名
幹事	若干名
書記・会計	二名
顧問	若干名

第七条 会長は町長を当て、副会長監事は幹事会の推薦による。幹事は総代会の役員、神職会の役員神社庁支部役員及び社会教育文化財担当の内より充てる。

書記会計は会長が委嘱する。

顧問は役員会の推薦による。

役員の任期は一ヶ年とし再選を妨げない。

役員の仕事

第八条 会長は本会を統轄し会務を統理する。

副会長は会長を補佐し会長事故ある時は副

会長これを代理する。

幹事は本会の重要事項の審議並びに予算、決算及び事業計画を立案し会の推進をはかる。

会計は経理をつかさどり書記は会議の記録をする。

顧問は会長の諮問に応える。

総会並びに臨時総会

第九條

総会は年一回とし四月これを行い主要事項を議決する。但し必要ある時は会長これを召集し臨時にこれを開く事ができる。

会議の運営並びに議決

第十條

会議の議長は会長をもつて充てる。会議の議決は出席者の過半数で決し可否同数の時は議長の決するところによる。

経費

第十一條

本会の経費は会員の会費及び町の補助金寄附金その他をもつて充てる。

第十二條

本会の会計年度は四月一日にはじまり翌年三月三十一日に終る。

附則

第十三條

本会則は昭和四五年二月一〇日より施行す

る。

(2) 実施方法 (一)

大神事においては境内の広場を齋庭と定めその四隅には竹を立て中に四〇枚の筵を敷く。その北側には神籬ひちろうぎを立てる。これは高さ五米程の榊かしわ(又は椎)を中央にして榊かしわ(椎)を密集して山なりの垣を作るもので、その上に金銀の御幣奇数本を挿す。神籬の中心の木から四本ずつの注連しづめを向両隅の竹に張る。また同一の場所から別に榊かしわの注連を張る。これは一筋毎に扇一本を結びつけ幣には柴も一緒に差したもので偶数本とする。神籬を立て大幣を作り注連を張る作業を氏入の行事といい、これは前夜行われるが、この時神楽三番が舞われる。

大神事の神楽は午后八時に拜殿に勢揃いし、当番神社の宮司から役割の申渡しがあり、本殿にて祝詞奏上の後、同一神籬が高く立ち神饌が豊かに並ぶ齋庭に移る、齋庭の傍には松明台たいまつを設け終夜火を絶やさない。齋庭では神職と神楽方とが双方に分れ修祓降神供饌の後神楽が開始される。楽器は太鼓と笛だけである。

(2) 実施方法 (二)

4 実施内容

1. 大神事神楽場 当番神社で設営する。
2. 時期 旧一二月一日(まわりかぐら)
一二月五日 (比木神社例年奉祭)
3. 服装 狩衣で面を着ける。(比木神社二〇面の外各神社にある)
4. 用具 笛・太鼓・面・鈴・大刀・杖・御幣
5. 神楽人 現在 二〇人位
6. 楽人の種類 祝人交替で奏する。
7. 神楽の種類 三三番 次にしるす。
特に著名なものは次の七番である。

- (6) 鬼神舞
- (7) 將軍舞
- (8) 間舞
- (9) 節舞
- (13) 振揚舞
- (19) 繰卸舞
- (29) 手力雄舞

第一番 御神楽おかくら(神楽始めの舞)

二人舞で各々狩衣を着け烏帽子を冠る。右手に鈴、左手に扇子を持ち静かに舞う。

「楽人唱う」此所よき此所と地を誉めて、処を誉めて神を招ずる。東上りて西下りたるを青竜の地と誉め奉る。南上りて北下りたるを黄竜の地と誉め奉る。西上りて東下りたるを赤竜の地と誉め奉る。北上りて南下りたるを白竜の地と誉め奉る。四方下りて中高くなるを黒竜の地と誉め奉る。四方上りて中平らなるを黒竜万倍黄金の大地と誉め奉るとこそ説き置き給ふよ。ハンヤ日向なる伊勢男の妻の五十鈴川、万世までも流れたえせず。

「舞人唱う」伊勢の国山田ケ原の榊葉に、心の注連しめを引かぬ間もなし。抑々地神五代は第一に天照皇大御神、第二に正哉吾勝速日天忍穗耳尊、第三に彦穗瓊々杵尊、第四に彦火々出見尊、第五に鞆茅葺不合尊と申奉る。御后みご神は玉依姫命と申し給ひて人皇第一代に当らせ給ふ神武天皇を産み給ひて、元の竜宮に帰らせ給ふとこそ説き置き給ふよ。ハンヤ榊葉は何時の時にか折りそめて岩戸の前にヤア飾りとはせし。「舞人」千早振る神代の鏡掛けて見よ神代はいつも曇らざりけり。抑々二柱の大御神と

申奉るは此国に下らせ給ひて三柱の神等を産み給ふ、一に天照大御神二に月夜見之尊三に素盞鳴鳴尊とこそ説き給ふよ、ハンヤ西の海櫓が原の、「楽人」浪間より現れ出でし住吉の神。

第二番 花の手はなの手

二人舞で各舞衣を着け折烏帽子をかぶり右手に鈴左手に扇子を携え次に左右の手で榊葉を撒き、両手に之を持ち或は口にくわえ、後榊葉を盛った盆を持つて舞う。

「楽人」伊勢の国古き社をあらためて今の社と拝むめでたさ、ハンヤ此程に結びこめたる願の紐今こそ解くるヤア神の心かな。「舞人」雨の降る高天原を通り来て清めの雨にあふぞ嬉しき、ハンヤ榊葉はいつの時にか、「楽人」折り初めて岩戸の前にヤア飾りとはせし。「舞人」小夜中にあいの風吹くおもしろや神風なればしなやかに吹くハンヤ我が氏は我とぞ折る「楽人」われなるいしはヤアわかくなるらん。

第三番 荒神返こうしんがえし

四方に一人づつと中央に一人の五人舞である。烏帽子をかぶり狩衣を着ける。この舞は大神事の前夜の「氏入の神事」に於ても、一番の御神楽、一四番の地割と共に舞われるもので土地を潔める神楽といわれる。

「舞人」抑々まはり来れる年の御次第いいで申せば辛丑年まらう歳周

ける元三初りて天門な周地門なさこる今朝の朝日の豊栄登りますには白金に花咲くと申す、夕日の豊天上のぼりの下りますには黄金の見え成ると申す。寿明神門、神門かのふか時を以て神の御門をし周り申さしめ給ふ。夫れ日本は帝朝の御門豊葦原の中津国、皇上花の京都みやこ平之京、京よりは西西方よりは辰巳に当り、豊後に界ひて日向の国は五郡八院五つの都、殊に取わけ候て新納の院に斎はれます比木五社大明神、地邑のおばねの敷地に齡久しく決定仕り候此方こゝかた、朝には霧を蒙り夕には星を頂き、諸神潔斎にして二つの心を一にしなし何くよりもセウマリウ清浄にて取り整へ申さしめ給ふ。殊に此御注連を誉め奉るに、上にゑんを二つぬく事は日神月神是をまなべたり、幣帛をさす事は三十三天をまなべたり、八つ注連を引く事は今日今夜の八卦九星の星の綱なり、殊に此御注連に勧請申し奉るは、天照皇大神宮、八幡大神宮、春日大明神勧請申し奉る蛭子命、素盞鳴命、吉田大明神、熊野権現、比木大明神並神明宮、神門大明神、大年大明神、宮田大明神、八幡白山童之宮、天神霧島大権現、鶴戸大権現福之八幡都萬宮、国中の神社日本大小の神祇、殊に取分け取整へ候ものは御供御酒折米しとう立とう杜けんの御花米丸之御鏡、何くよりもセウリウ清浄にて取整へ申さしめ給ふ数の御神楽なし給ふ再拜再拜敬て申す。山里は夜

こそ寝られね中々に松吹く風に驚かされて、山里は夜こそ寝られるれ中々に八幡の馬場に朝日射すまで。山里は育ちは何処ぞと石清水八幡の馬場の若松の枝。

第四番 太神舞（かんなぎとも云う）

一人舞。黒髪の太神面（天照大御神を象る）をつけ冠を頂く。茶の舞衣に綿の緋袴をはき左手に大御幣（みこころ）をかつぎ右手に扇子を持つて静かに舞う。「舞人」みてぐらは誰がたてそめしみてぐらか「楽人」あめわかひこがためしみよかな「舞人」あららぎの里より吹くか松風か「楽人」吹けばさびしきあららぎの里。

第五番 敏伐舞（びざま）

二人舞で舞衣をつけ両脇に御幣を挟み、右手に鈴左手に扇子を持つて舞う。頭には綿帽子をつけている、次に御幣を持ち舞衣を脱ぎ手に持つて演舞するが、国土の平安と国家の弥栄を祈願する舞と云われている。

「楽人」伊勢の国山田ケ原の榊葉に心の注連をひつぬまもなし、ハンヤ御小屋に今ひく注連は金の七五三黄金の注連とヤア引いてまします「舞人」君が代は限りもあらし長浜の真砂の数は読み尽すとも、ハンヤ君が代の久しかるべき「楽人」ためしにや神も植えけん住吉の松「舞人」よき祝ひ七つの松の枝毎にそめし緑は若くなるらんハンヤ山里は夜こそ寝られね中々に松吹く風にヤア驚か

されて。

第六番 鬼神舞（きじんまい）

黒髪の鬼神面を被り青鉢巻、白衣の上に赤の千早（裃）を着け緋袴をはく、右手に鬼神杖（青赤白のめん棒）を持ち左手に扇子を携えて舞う、大御幣を両脇に挟む。舞の途中二人の神職が中に入り扇を開いて一緒に舞う。

「舞人」草も木も我が大君の国なれば「楽人」いづくか鬼のすみかなるべき「舞人」立帰りまたもみまくも欲しきかな「楽人」みもすそ川の瀬々の白波。

第七番 將軍舞（しやうぐんまい）

二人舞、腰に刀を帯び背に矢を負う、初め左手に弓右手に鈴を持つて舞う、次に左手に弓右手に矢を持つて舞った後矢を放つ、のちに弓を置いて両手に矢を持つて演舞する。頭に面帽子手甲脚絆の軽快ないでたちである。

「楽人」弓も矢も国も静かに治まりて尚静かなる住吉の松ハンヤ榊葉をさしてぞつむぎの追風になびかぬ神はヤアあらじとぞ思ふ「舞人」弓も矢も国も静かに治まりてなほ静かなるこの所かな、抑々八幡大神宮と謂つば崇敬崇廟の大社なり、神祇往古（かみ）の神明にてましませば、頭に馬頭の甲（かぶと）を着し身に五徳の鎧を着け腰にダンビラ関の前刀ハンヤ一級の槻弓（き）にいしにぐをの弦を張り総定紋の籠（かご）には五百足らずの矢数を差し馬は九面相の馬安置（くま）にあ

きのおもがい、国土満足と云ふ鞍を敷きだんの腹帯強く締めうちめの鍔踏みそらし彼処三遍打逃れは天の魔王も静まり給ふよハンヤ伊勢の国山田が原巡榊葉に心の注連をヤア引かぬ間もなし。「舞人」千早振る我心よりなす業を何れの神かよそに見るべき。抑々將軍と謂つば頭に馬頭の甲を着し身に五徳の鎧を着け胸に黒皮の紐をつがい腕に九形九月の籠手を当て足に磐石の靴を穿き能き城に能き武者こむれば万騎の武者も退いてこそ行くハンヤ振立る五十鈴の音に神さへて人の種こそヤア人の種なり。

第八番 問と 舞ま

一人舞、狩衣を着け烏帽子をかぶり左手に御幣二本を持ち右手に鈴を携えて演舞し次の節舞と合同して荒神と問答する。

第九番 節む 舞ま

舞人神前に座し荒神面と黒髪を被る。金銀赤錦の上衣を着し青錦の袴をはき両腰に御幣を挟み扇子を帯び御幣付の鬼神杖を右手に持ち初め榊葉を撒き後に扇子を携えて一人で舞う。猿田彦の舞といわれる。次に將軍舞の舞人二人が弓と鈴を持って鬼神と一緒に舞う。その間傍に控えていた問舞の神職が進み出て上座の大太鼓に腰をかけた鬼神の前で礼拝しお祓いをした上次の歌を唱えた後問答を始める。この神樂は三三番の中で最も長い時間を

要する。

霧島の峯より奥の月晴れて新たに拝む天の逆鋒。

日向なる逢初川のうらにこす宿世を結ぶ神にまします。

霧島の御池のかたで誰はしるはまに五色の波のたつとき

「問」白金や黄金の梅が花咲くや神の戸のとも開かざらめや、天津神国津社を祝ひてぞ我葦原の国は治まる。

抑々天長地久御武運長久御息災延命五穀成就の為に祭典並御神樂執行奉る処に俄に御出現ましますは如何なる御神明にてぞましますやらん御宣みのたまの程の御託宣註文申入るべく存じ候へ再拜再拜敬つて申す。

「節」抑々三宝大荒神の謂はれ汝知るや知らずや、神に大庭おおはのみさき仏に伽藍のみさき八万四千劍のみさきと現ずるとあれなり、汝にはや教へとらす。

「問」扱々三宝大荒神殿と御名宣のたまなされまして神主も安住仕りて御座ります。お許しなされませ。

「節」神主、まだ許せとははるばるの事。

「問」左様御座りますならば一寸御崇敬にまかり立ち申して、ちと大荒神殿へお尋ねの儀が御座り申す。

「節」如何なる事でも問はれよ指し示さん。

「問」鳥居の根源をお示しに預りとう御座ります。

「節」神主申し上げよ。

「問」何れの道荒神殿のお示しに預りとう御座る。

「節」 神主、我が前に立てる程の神主申し上げよ。

「問」 左様御座りますれば不束なる神主に御座りませぬと後と先でも申上るで御座る。

「節」 神主申し上げよ。

「問」 抑々鳥居は日の大御神天の岩戸に籠り給へりし時、八百万の神等神議りに議り給ひて日の大御神出まし給はんことを祈り給ふ時、木を岩戸の前に立て其の木の上に鶏居らしめて鳴かしむ、所謂鳥居の始めなり、右の柱は陰左の柱は陽、木を其上に通はず物は陰陽互感の理なり再拝再拝敬つて申す、もうお許し成されませ。

「節」 執心な神主よう心得られた、託宣を指し示す。

「問」 有難う御座る。

「節」 抑々地神由来の三徳を兼ね国々を巡り氏子繁昌と守るが為め天より宝を下し地より五穀を生じ事万物に至るまでは皆我が為す所作なり、汝に早や教へとらす。

「問」 扱々御託宣に預り申して神主も安住仕つて御座ります、もうお許し下さりませ。

「節」 神主まだ許せとは遙々の事。

「問」 左様御座りますならば、一寸敬ひ申した後お許しなされませ。

「節」 許す折もあらん。

「問」 千早振る我が心より為すわざを何れの神かよそに

見るべき、榊葉は何時のときにか折りそめて岩戸の前に飾りとはなる。もうお許しなされませ。

「節」 未だ許せとははるばるの事。

「問」 左様御座りませぬと大荒神殿へ御尋ねの儀が御座ります。

「節」 何ような事でも問はれよ、指し示さん。

「問」 地神五代の根源をお示しに預りたう御座ります。

「節」 神主申し上げよ。

「問」 何れの道荒神殿のお示しに預りたう御座る。

「節」 神主侮らるる事を申さるるな、神主。

「問」 御侮りとの御咎め殆んど迷惑仕てござる。何れの道荒神殿のお示しに預りたうござる。

「節」 神主、我前に立てる程の神主がそれしきな事を知らぬ神主とは見立んなれど知らぬと云はるるに就て聊か指し示す、抑々地神五代は第一に天照大御神、第二に正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、第三に瓊々杵尊第四に彦火出見尊、第五に彦波瀲武鸕茅葦不合尊、是我国五代の神にまします、汝に早や教へ取らす。

「問」 扱々御託宣を承りまして愈々安住仕てござりますもうお許しなされませ。

「節」 神主未だ許せとははるばるの事。

「問」 扱々今日も段々御神楽数の儀に御座候得ば、日も

西に傾きまして御座る。あとで御神楽仕へ奉るによりお許し下さりませ。

「節」神主許し難なけれども後で御神楽仕へまつると云へるに依りて差し許す。

「問」有難う御座る由もの事に、御杖ともにお許しなされませ。

「節」神主、此杖は三千世界を吾が心の儘に為す宝の杖、此杖は許しがたねし。

「問」左様な御宝の杖とお見受奉りまして、氏子共に諸の災ある時は御杖を以て打ち祓はんが為お願ひ奉る訳でござる、何れの道お許しなされませ。

「節」許し難なけれども氏子守りといへるに依りて差し許す、あゝ許しがたねし。

第一〇番 舞揚

神主の一人舞、猿田彦から杖を授かつた感謝の舞といわれている、宮司の正装で壮重な舞である。大神事関係の六社の中で最も元老格の宮司が舞うことになっていて、この舞の稽古ができるようになると一人前の神職として認められたことになる。

第一一番 磬石

この神楽は特異なもので「メゴンメ」と呼ばれていて国生みの神楽と伝えられる。磬石の面をかぶり手拭で姉

さん被りにする。赤い着物をつけ腰にテゴ（手編みの籠）をぶら下げる。初めは左手に大御幣右手に鈴を持って剽（ひょう）に舞う。次に御幣と鈴を置き腰に下げたテゴの中から腕としゃもじを取出し楽人や神職とおもしろい問答をしながらおかしな所作をする。次に摺木を取出し問答や所作を続けて見物人を笑わせる。摺木は男根の役をするもので、増産と生殖とを祭祀の目的とした古代の習俗を残すものであるが、この神楽はその唱言と共に風俗に害があるとして大神事の時だけに限っている。

第一二番 神師舞

六人、八人または一二人行なう、何れも面帽子をつけ袴をはき襷を掛ける、右手に太刀の抜身を持ち左手に鈴を携えて舞う。次に鈴を置き太刀だけを持って激しく演舞する。

「舞人」振り立つる五十鈴の音に神さへて人の種こそ人のたねなり、千早振る我心より為す業を何れの神かよそに見るべき、剣とる青葉の山におひ上り海路の海もひいてこそいる。

第一三番 振揚舞

一人舞で剣難除の舞といわれる。毛頭をつけ白衣に黒袴をはき青襷を左肩から斜に垂らし素手で舞う。次に襷を十文字にかけ右手に太刀の抜身を持って舞い次に二本

の太刀を両手に持つて演舞する。

第一四番 地割

五人舞、三番の荒神返と同じく中央と四方に一人ずつ立つ、面帽子を被り白衣に袴をはき襷を掛け太刀と鈴を持って舞う。この神樂はその唱言のために明治の中頃から長らく舞われなかつたが近年復活したものである。

「舞人（中方）」目出度かな貴きかなたうざんの帝を奉るに言語道断殊勝に候者哉、夫日本初て国を領主し奉り歲月年号何時なるらん、栄惣（永祚か）元年辛卯の年、東方に青帝青竜王南方に赤帝赤竜王西方に白帝白竜王北方に黒帝黒竜王中方に黄帝黄竜王此の如く五方に五石かいおりし立存じ候処弓をあいどの袋に入れ矢をばごけつの筒に入れ立大ぞうかいの箱に入れりし立存じ候が各々利間をぬきもつて洩します神明の御託宣の如何に。

「舞人（東方）」言語道断殊勝に候者哉東方と謂つば方を申せば甲乙の方也御主を申せば青帝青竜王と現じ給ふ命を申せば天之八十萬日魂命と現じ給ふ東方よりも悪魔打ち来らずと存じ。「中方」東方の謂はれ此の如く細々に承はられ候が是より南方に御立守護します神明の御託宣の如何に。「南方」言語道断殊勝に候者哉南方と謂つば方を申せば丙丁の方なり御主を申せば尺帝尺竜王と現じ給ふ命を申せば天之あい魂命と現じ給ふ南方より

も悪魔打来らずと存じ。「中方」南方の謂はれ此の如く細々承はられ候が是より西方に御立守護します神明の御託宣の如何に。「西方」言語道断殊勝に候者哉西方と謂つば方を申せば辛庚の方なり御主を申せば白帝白竜王と現じ給ふ命を申せば天八百日魂命と現じ給ふ西方よりも悪魔打来らずと存じ。「中方」西方の謂はれ斯の如く細々承はられ候は是より北方に御立守護します神明の御託宣の如何に。「北方」言語道断殊勝に候者哉北方と謂つば方を申せば壬癸の方なり御主を申せば黒帝黒竜王と現じ給ふ命を申せば天之三下魂命と現じ給ふ北方よりも悪魔打来らずと存じ。「東方」北方の謂はれ此の如く細々受取給はれ候が是より中方に御立守護します神明の御託宣の如何に。「中方」言語道断殊勝に候者哉中方と謂つば方を申せば戊己の方なり御主を申せば黄帝黄竜王と現じ給ふ命を申せば天之八下魂命と現じ給ふ中方よりも悪魔打来らずと存じ。「東方」中方の謂はれ此の如く細々承はられ候が是より天の如何に、天より一度うんろの事此所に悪魔を降来らんと存じ外には天の大方を申し卸し内には天かいびやくかい申下し、前には旗を立て木萬神方はしん山ふうにてまします大鼓を打ち銅拍子を合せ笛を吹き舞の袖を翻へし天よりも悪魔打来らずと存じ、天の謂はれ此の如く細々承はられ候が是より大

地は如何に。大地と謂つば昔ばんご大太五郎の王子の持たる大地なり地の深き事五万五千五百五十五尋五厘五分也其下に火輪水輪風鈴一つある廻り其下に万行といふをって大地をもたへ守護しますます大地よりも悪魔打起らずと存じ、大地の謂はれ此の如く細々に承はられ候が是より十二方は如何に、ぎんかはり十二方、子の方には子腹大小、丑の方には丑腹大小、東方取つても長樂長、南方取つても長樂長、西方取つても長樂長、北方取つても長樂長、中方取つても長樂長、方切こ切と切る程に金の大地と固めたり弥固めたり、昔や山大らの三年奈良石長門こそ立附よ弥立付よ弥立付よ。

第一五番 帳ちよう 読よ

幣帛料を供した者の住所氏名を祭主が神靈に奏上する。

第一六番 祝のり 詞と

幣帛料を供した者を初め氏子の家内安全家業繁昌火祈禱病祈禱等を神靈に当番神社の宮司が祝詞を奏上する。

第一七番 關開びやくかい 神樂かくら

二人舞、舞衣をつけ右手に鈴を持ち左手に扇子を持つて舞う。

第一八番 關開びやくかい 鬼神きじん

素盞鳴命が稲田姫をめぐって喜ばれたときの舞と伝え

られている。白髪の鬼神面をかぶり錦の舞衣をつける。両腰に御幣をはさみ右手に御幣付の鬼神杖を持ち左手に扇子を持つて天を仰いで舞う。この神樂の途中に關開神樂の舞人二人が中に入り一緒に演舞する。

「舞人」天地陰陽の根源なり、青海原や天津御鉾の露落ちて「楽人」島とならなば国はあるまじ。

第一九番 線るいせん 御舞

八人一〇人または一二人で舞う、舞衣は着けず袴だけを着用初め右手に鈴左手に扇子を持つて御神樂を演じ、次に左手に練御の注連縄を持ち右手に鈴、次いで注連縄だけを持つて演舞する。

第二〇番 御み 笠かさ 神樂かくら

二人にて舞衣を着け右手に鈴左手に扇を持つて舞う。

第二一番 笠取かさとり 鬼神きじん

第六番の鬼神舞と同じ装束を着け似た舞であるが、採物に笠を持つところが異なる。前番の御笠神樂が終らぬうちに舞い始めて、笠を持ったまま前者の舞手二人の肩をもむ。

第二二番 御み 笠かさ 神酒かみきあけ 上

一人舞、狩衣を着け折烏帽子をかぶり神樂の縁起を唱えて神前に神酒を供える。

第二三番 御み 笠かさ 將軍しやうじん

二人舞、舞衣を着け手に弓を持って舞う。のち次番の神楽の間傍らに控え、御笠練舞には子供達までが出て大勢後に連り倒れるので最後（四回目）にそれらを起して終る。

第二四番 御笠練舞

多人数で何れも面をかぶり一列に並ぶ、御幣を右手に持ち左手で前の人の帯を捉えて順次後につながり、或は転倒し或は相連つて演舞する。

第二五番 獅子舞

二人が雌雄の獅子面をかぶつて舞い次に場内を暴れ回つて人々をかむ。一通り演舞すると次の綱取鬼神舞が始まつて再び暴れ出し舞手にかみついたりしていたずらをする。

第二六番 綱取鬼神舞

鬼神の一人舞、白髪 of 鬼神面をかぶり白衣に茶袴をはき赤襷をかける、両腰に御幣をはさみ左手に鬼神杖を持ちすこぶる活発に舞う、次に杖を腰に差しこみ素手となつて両手で雌雄の獅子を取鎮める。

第二七番 寿之舞

一人舞、烏帽子をかぶり翁面をつける。白衣に茶袴をはき腰に御幣一本をはさみ右手に杖をつき腰を折つて舞う。舞の途中二人の舞人が出てきて扇子と鈴を持ってし

ばらく一緒に演舞する。なお出場の時、退場の時とも翁は神職に背負われて進退する。

「舞人」抑々住吉の神とは我れ権現なり、立帰りまたもみまくも欲しき哉「楽人」みもすそ川の瀬々の白波。

第二八番 伊勢舞

一人舞、狩衣を着け烏帽子をかぶり太刀を帯びる。左手に一本の御幣を持ち右手に鈴を持って舞う。次に扇子のみを持ち次に素手で演舞して神楽の縁起を唱える。

「舞人」君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけん住吉の松、君が代は千代ともささじ天の戸や出づる月日の限りなければ、伊勢の国山田が原の榊葉に心の注連を引かん間もなし。萬代と御笠の山に呼ばふなる天が下こそ樂しかりけれ。抑々我国已に成つて三柱の神生れ出で給ふ、第一に大日貴靈尊生給ひ此神くしびに光り美はしくましまして、天地の内に照り通り故に御祖神等甚く喜ばして高天の原を治しめすべしと事依し給ひて天に送り上げ奉り給へり。次に月夜見之尊生出給ふ此命は夜の食国を治せと事依し給ひき、次に素盞鳴尊生出給ふ、此神に海原を治せと事依さし給ひき、然るに此神へ依し給へる国を治さず、八拳ひげ胸前に至るまで啼きいざちき。其泣き給ふ様は青山を枯山なす泣き枯し海川は悉くに泣き干し給ひ或は天照大御神の御菅田の畔放ち溝埋め又其大

嘗聞食す御殿に尿まり散しき、故然すれども天照大御神は咎めずして宣り給はく、尿なすは酔ひて吐き散らすとこそ吾汝兄命は斯くしつらめ、又田の畔放ち溝埋むるは地を新しくとこそ吾汝兄命斯くしつらめと宣り直し給へども猶其悪しき態やまずてうたてあり天照大御神忌服屋にましまして神衣を織らしめ給ふ時に其服屋の棟をうがちて天の斑馬を逆剥にはぎて墮し入る時に天の衣織女見驚きて梭にほとを突きて身失せき。茲に天照大御神見畏みて天の岩屋戸を閉て差籠りましましき。故高天原みな暗くて葦原中津国悉くに暗くて常夜ゆく。茲に萬の神のおとなひさばへなす皆湧き万の災悉くに起りき。是を以て八百万萬の神天の安の河原に神集ひ集ひて高皇産靈神の御子思兼神に思はしめて常夜の長鳴き鳥を集へて鳴かして、天の安の河の川原の天の堅石をとり天の金山の鉄を取りて鍛人天津麻羅を覓ぎて伊弉許理度売命に仰せて鏡を作らしめ、玉祖命に仰せて八尺の曲玉の五百津御統の玉を作らしめて天兒屋根命布刀玉命を呼びて天の香山の天のははかを採りて占まかなはしめて天の香山の五百津真榊を根こじにこじて上枝に八尺の曲玉の五百津御統の玉を取り付け中枝に八咫の鏡を取り懸け下枝に白和幣青和幣を取りしめて此種々の物をば布刀玉命大御幣取り持たして天兒屋根命太祝詞言ねぎまをして、天手力男

神御戸の側に隠り立たして天宇受売命天の香山の日蔭を櫛に掛けて天のまさきをカツラとして天の香山の笹葉を手草にゆひて天の石屋戸にほところたき覆槽伏て踏みとどろこし神懸りして胸ちをかき出て裳紐をほとにおしたれき。故高天原ゆすりて八百万の神共に笑ひき。茲に天照大御神天の岩屋戸を細目に開きて内より宣り給へるは、吾が隠り座すに依りて高天原自ら暗く、葦原中国も皆暗けんと思ふをなぞて天宇受売は遊びし又八百万の神諸諸笑ふとぞ宣り給ひき。而して後稍戸より出て臨み給ふとき天手力雄神其御手を執りて引き出し奉り給ひき、即ち太玉命尻久米繩を其御後方に引渡して此処より内にな還り入りましそと白し給ひき。故天照大御神の出でませるによりて高天原も葦原中国も自ら照り明りき。此時ぞ御神樂の始めとは也ける。千早振る我心よりなすわざを何れの神かよそに見るべき。

第二九番 手力雄舞

手力雄の面をかぶり烏帽子を頂き左手に御幣二本を持ち右手に鈴を携えて舞う。

「舞人」振り立つる振り立つる五十鈴の音に神さえて人の種こそ人の種なり。暗き夜に暗き夜に何とて岩戸明けにけりさよつげひとの里神樂。やあら不思議に候もの哉われ権現なり次に大神の光を出だしいでもいでたし給

はらん候物哉。いざや戸開の明神とまします天の岩戸を取りて引き開き日の光を出だし一切四方の世上に拝ませ申さむ。千早振る千早振る我心よりなすわざを何れの神かよそに見るべき。たちかへり立帰りまたも見まくも欲しき哉御裳川みもすがわの瀬々の白波。

第三〇番 戸開雄舞とびらきのまひ

一人舞、戸開雄の面をかぶり戸開雄の服を着し幣付の杖を手に持つて舞い次に杖を腰にさして素手で舞い次に岩戸を開き坐つて演舞する。

「舞人」戸開の神とはわれ権現なり。やあら不思議に候もの哉我権現なり次に大神の光を出し奉らんもの哉いざや戸開の明神とましますあの天の岩戸を取りて引き開き一切四方の世上に拝ませ申さむヤア榊葉は何時の時にか「楽人」折りそめて「舞人」岩戸の前に「楽人」飾りとはせし「舞人」ヤア千早振る我心より「楽人」なすわざを「舞人」いづれの神か「楽人」よそに見るべき「舞人」ヤア敷島の道を称えし「楽人」あれあれとして「舞人」天上天元「楽人」鬼かどくそく「舞人」ヤア思ひます心は空に「楽人」通へども「舞人」月を手にとる「楽人」言の葉もなし「舞人」ヤア東山小松かきわけて「楽人」出る日の「舞人」あれほどたかき「楽人」海の原なり「舞人」月と日とひとつつれまの「楽人」池の水「舞人」

澄まん限りは「楽人」あれあれとして。

第三一番 柴舞しばまい

二人舞、白衣に黒袴をはき刀を腰に佩き両手に夫々榊の束を持つて舞う。その後異様の奏楽裡に薪を燃やす。この神楽は別の淨地で行はれ昔は牛七駄半の薪を燃やす定と伝えられた残火を供える行事がありかつては残火を踏んで渡る等の行事が行はれた。

第三二番 太神だじん

一人舞、黒髪の太神面をつけ天冠を頂き緋袴の貴人の衣裳を着け、左手に日月右手に岩戸（作り物）を持つて坐る。戸開雄の舞の時から奥に静かに坐っているもので戸開の舞のあと唱言があつたが明治以後唱言は絶えた。

第三三番 神送神楽かみわくりかくら

二人舞、白衣白袴右手に鈴左手に扇を持つて舞う、舞の手振は第二〇番御笠神楽と同じ。

5 参 考

(1) 宮崎県内神楽の概要

宮崎県の神楽は日本の神楽の祖系といわれ、県下各地で行われている。最も著名なものは高千穂岩戸神楽で、昭和二七年二月宮崎県無形文化財に指定され、次いで米良の銀鏡神楽は昭和三七年四月指定、高鍋神楽は昭和

四四年四月一日附で指定され、高鍋神楽保存会により維持発展が図られている。その他西臼杵郡五ヶ瀬町鞍岡の祇園神楽、西諸郡高原町の祓川神楽、南那珂郡の北郷神楽（愛宕舞）南郷神楽（八社舞）などがあり、何れも三三番乃至三六番が舞われている。

高千穂神楽は神話の昔に始まると伝えられ、神事祭典に奉納される外、民家で行なう里神楽或は野神楽と呼ぶものとの二種がある。式参番岩戸五番など三三番の舞台があり、民家のものは幾つかの組合があつて毎年交代で行い、秋の収穫終了後五穀豊穡の感謝祈願として高千穂郷八八社の各地区毎に鎮守を中心として徹夜して行われる。この神楽は面、衣裳などに芸能的な発達の跡が見られる。銀鏡神楽は日本最古の形を留めるものといわれ、太古以来の住民の純真素朴な信仰に支えられて続いておるものであるが猪の首を供える「狩法神事」など特殊のものがあり夜を徹する神楽の敬虔優雅さで著名である。高鍋神楽の装束は狩衣烏帽子などが多く概して清楚で坐作進退に特長があり舞様は高尚優美しかも勇壮活発で古風の床しさがある。

神楽の唱言はすべて口伝で伝えられたものでよるべき古い記録は無くまた其の内容は中世の両部神道、陰陽道などの影響を受けており中には意味の理解し難いものが

ある。高鍋神楽は高鍋・木城・新富・川南・都農各町と神門神社を中心とする南郷町及び東郷町の一部の神社の祭典に奉納され、また神葬祭その他の神事においても数番が舞われることがある。

(2) 宮崎県内の神楽の形態

全国到るところで「かぐら」が奉納されている。祭や神事にはきまつて神楽がある。或説によると、宮崎県が「かぐら」の全国の祖系であるとも云われている。

地域によつて、装束や、持ち物、所作は異つてはいるがそのもとは宮崎県かぐらであつて、永い間の地域の風俗習慣の影響をうけて地域差を生じた独特なものに変形されたものである。分けてみると、四つの型がある。

1. 山地神楽 高千穂、鞍岡、米良周辺の山地に行われるもの。
2. 平地神楽 海岸地方特に高鍋などの集落地を中心として行われるもの。
3. 盆地神楽 盆地特に都城、高原を中心に行われる。祓川神楽と呼ばれ隣県鹿児島の影響を多分に受けている。
4. 北郷神楽 南那珂郡北郷町に行われているもので鵜戸神楽のもとをなすものである。

番数について

もとは三六番までであったが、普通三三番までである。

現在南那珂郡北郷神楽は三六番、高千穂、鞍岡、銀鏡神楽、祓川神楽は三三番、高鍋神楽は明治時代までは三一番、大正以降は二九番（現在三三番）、都農神楽は二八番である。

(3) 宮崎県内主要神楽番付名称表(一)

1. 彦舞	高千穂神楽	星の舞	銀鏡神楽	高鍋神楽	御神楽(神楽始舞)
2. 太殿	清山	花の舞(結界)	地割	花の手	太神舞(かんなぎ)
3. 神下し	花の舞(結界)	地割	鶴戸神楽	荒神返	敏伐舞
4. 鎮守	鶴戸神楽	鶴戸鬼神(初三舞)	西宮大明神	將軍舞	幣指
5. 杉登	幣指	宿神三玉稻荷大明神	幣指	問舞	節舞
6. 地固	宿神三玉稻荷大明神	初三舞(二)	舞揚(まいあげ)	磐石(ばんせき)	神師舞
7. 幣神添	初三舞(二)	六社稻荷	神崇(かんすい)	神師舞	振揚舞
8. 武智(むち)	神崇(かんすい)	神崇(かんすい)	莊巖(弓將軍)	振揚舞	
9. 山森(四人鞭)	莊巖(弓將軍)				
10. 柴引					
11. 伊勢神楽					
12. 手力男命					
13. 宇受売命					
14. 戸取	柴荒神(面の舞)	地割			
15. 舞開	一人剣	帳読			
16. 住吉	繩荒神	祝詞			
17. 地割	繩神楽	關開神楽			
18. 御柴	衣笠荒神	關開鬼神			
19. 御神体	神和(かんなぎ)	縁卸舞			
20. 沖逢(おきえ)	若男大神	御笠神楽			
21. 八鉢(やつぱち)	大神神楽(伊勢神楽)	笠取鬼神			
22. 七貴人	手力男命	御笠神酒上			
23. 弓正護	戸破妙神	御笠將軍			
24. 弓神添(ゆみかんぜ)	住吉	御笠練舞			
25. 本花	宝の神(杓子面舞)	獅子舞			
26. 袖花	火の神舞(おきえ)	網取鬼神舞			
27. 五穀	鬼神(こすかし面)	寿之舞			
28. 岩くぐり	獅子舞	伊勢舞			
29. 大神(だいじん)	白蓋鬼神(あまほめ)	手力雄舞			
30. 日の前	笠取鬼神	戸開雄舞			
31. 繰下	鎮守(くりおろし)	柴舞			
32. 注連口	狩法神事(ししときり)	太神			
33. 雲下	神送り	神送神楽			

む す び

高鍋神楽は、県内各地方で演奏されているものと比較、観賞しても服装容姿・舞い振り・大神事場設営・舞人に到るまで数百年の伝統と、由緒深い比木神社を中心として発達した神楽で、清楚優美で昔の民俗を偲ぶ特色のあるものである。

日本民俗芸能として、その起源は古く、神前に奏する崇高な歌舞として、永い間の歴史を経て現代まで維持されているもので、後世に伝承すべきすぐれた文化財遺産であり、その保存については、各方面の協力を得なければならぬ。

この稿をまとめるにあたり、多年に亘る研究資料を提供して下さった、故大泉篤範氏に感謝し、高鍋神楽保存会の皆様のご協力にお礼を申しあげる。

以上

□ 鳴野の棒踊

1 はじめに

郷土民俗芸能のうち、勇壮な特色を持つもののひとつに棒踊がある。南九州各地に現存しているが、ここに紹介するのは、町内大字持田の鳴野地区のものである。日豊本線高鍋駅を北へ長い鉄橋を渡ったところの小丸川北岸に沿う地区で、五十戸ほどから成り、人口出入りの多い現在もなお、ほとんど戸数に変化なく各戸耕作面積の広い安定した裕福な地区で、川の上、中通り、深川の三小字がある。

2 棒踊の由来

(1) 伝説

地区の人々の伝えるところによると、今から百五十年前前に、地区に疫病が流行して水神のたたりといわれ、それには棒踊を奉納すると、ご利益があるとのこと、地区の岩切惣吉という人達が隣接の富田村(今の新富町)上日置(うわべき)から伝授を受けてきたということである。

右の惣吉という人の子の久保熊平、岩切熊次郎の兄弟、それに黒木惣吉氏などがこれを受けつぎ基礎が固まった

のである。この踊と関係の深い水神について次のような興味ある伝説がある。

地区の旧家黒木家の祖先が、あるとき下の鳴野川(小丸川の支流)に馬を入れておいたところが、その馬が河童(方言でヒヨウスン坊)をくわえて上ってきた。主人は驚いて河童を引き離そうとしたが、馬の歯が、その肩口に深くくいこんでいたために片腕がもげてしまった。

河童は、頭の皿の水が干上って弱っていたが、水を注いでやると元気づいて川へ飛びこんで見えなくなった。

河童がいなくなると馬が河童の片腕を離したので主人はこれを深く土の中に埋めてしまった。するとその夜から三晩続いて河童が現われ、「腕を返してください。三晩すぎると肩につがらぬようになるから」と哀願したが、主人は、それを拒んだので、これから、その恨みで地区に疫病が流行し人々を悩ました。

それで河童の霊を慰めるために、先ず川の上に水神が祭られ、その後深川(日豊線沿線近く)にも祭られ現在に及んでいる。

(2) 森栄氏の話(昭和五十一年二月)

昔の高鍋港は港が深く帆船の往来で賑わった良港で明治中期ごろまでは、鳴野にも木材を二五〇カタ〜三五〇カタ(一カタは、周五寸、長さ二間)を積む帆船が五、

六艘いて、木材の外、米、木炭などを積んで美々津港や細島港へ往来し、さらに八〇〇カタ〜一〇〇〇カタを積む大型船も三艘いて、木材等を阪神まで運び、帰路、石灰、獣骨（骨粉にする。当時の肥料は、石灰と骨粉が主だった。）建築石などが陸上げされ、農業とともに、これらの仕事に従事する人も多く、地区全体に活気がみなぎっていた。

しかし、帆船の賑わいとともに、疫病（コレラ）が流行し死者が多く出たが、川の上地区は水神があり、病気にかかる人は、ほとんどなく、中通り、深川に罹患が多く、水神のたたりとして、盛大な祭が催され勇壮な棒踊が駄祈念の日に奉納された。

鳴野の駄祈念は、盛大で、棒踊、奴踊、日清踊が踊られ、広く町内からも多数の参観者があつて、賑わつたこの話である。

以上の二説があるが、ここの棒踊の基といわれる上日置（うわべき）の棒踊は、下日置の水沼神社（こみすが神社）に奉納したもので、この神社は水神として有名で、今も鳴野では、危篤の病人があると、ここに参詣して祈願する風習がある。おそらく水沼神社の行事から、水神慰霊として、この踊を取り入れたものであろう。

3 変遷

このように百五十年の歴史を有するこの踊は、明治の末に至り、四・五年間断絶したが、大正元年のころ、森仲一氏等が再興し、その後は、第二次世界大戦のために壮丁も、物資も欠乏し、中止を余儀なくされた。

終戦後は、社会の混乱のなかに、地区の団結の必要から昭和二一年に黒水国太郎、森栄氏等の指導で再興し、現在に及んでいる。また、この年には、霧島の高千穂の峰頂上で実演し観光客を驚かした。

地区では、昔から踊れない者は、若者の恥とされ、ある家に養子を迎えたところ、踊れないために、実家に預けられたという話も伝えられている。

それだけに上日置から踊を習いに来たという話もあるが、現在では、水沼神社での棒踊の奉納は、中絶している。

4 現状

(1) 保存団体

この地区には、「日之出会」、「旭会」、という二つの団体がある。旭会は、学校を卒えて家業（ほとんど農業）に就いてから三十五歳までの男子によって組織され、

日之出会は、年令が右を越えた人達の団体で踊は、旭会員によつて保存されている。

(2) 実施の時期

年に一回、駄祈念（だきねん）の日に行われる。これは、旧暦九月初午に当り、秋の収穫期に入るため牛馬の安全を祈念する農家の祭事である。

実施の時期が、この日に行われることについては農事繁忙期を前にして行事統一をはかつたものと思われるが、今は駄祈念よりは、水神に対する行事が主になつてゐるのは、由来のところにあげた伝説等も思い合わされるが、秋といへば、この地方に洪水の大きを及ぼす小丸川が減水期に入ったときで、無事に一夏を過し得た感謝の意も含まれてゐると思われる。この行事の祝宴の夜、収穫感謝の六社代参がくじで選ばれるなど、何か通じたものがあるように思われる。

(3) 祭 宿

この日のために祭宿（まつりやど）が選ばれる。これは当日の準備の宿元となる家である。この祭宿を決めるには、棒踊後の祝宴の晩、祭宿でくじ引きをする。

くじに當つた家では、翌年の祭の日が近づくと畳の表替え、または畳表の裏返し、障子の張りかえ、その他入費も多いので、この家のために頼母子講が始められる。

それでは、祭宿に当ることを人々が嫌うかという反対に皆競つてくじに当ろうとする。これは宿元になつた家は、翌年は必ず豊作だと信ぜられ、実際に必ず豊作だといふのである。

(4) 当日の準備

当日の宿元は、朝から多忙で、各戸から男子一人ずつが集まつて傘づくりを始める。これは水神祠にかぶせる帽子のような役をする。先ず青竹を六〇〜七〇センチメートルぐらいの長さに切り、これを細く割つて傘の骨のようにし、紙を張つて仕上げると陣がさのようなものができる。

祭りの際、水神社に載せるのだが、ちよつと見ると河童の頭の皿を保護するような感じもする。婦人たちは、小番の人も加わつて直会（なおらい）のための料理等で多忙を極める。

こうして準備万端整うのは、午後四時近くである。したがつて行事の始まるのは例年四時の見当である。

従前は、この行事は三日間にわたつていたので準備も大変であつたが、最近では、生活改善の立場から一日に短縮されている。

5 実施の内容

(1) 実施の際の器具及び衣類

① 主器具

棒……長さ一・五メートル 踊手用一六本

唄手用一本

鎌……八丁(刃をすり減らし尖端を切る)

大太刀……長さ六〇センチメートル 八本

② 楽器 鉦二個

③ 衣類 普通の浴衣(ゆかた)を用いる。丈

を短くしなければ運動がはげしいので縫い上げをして加減する。

帯は、黒色を用いる。

④ 装身具

頭巾……黒 近来他所行きの外着用しない。

鉢巻……白 頭巾の上からしめる。頭巾を着用

しないときは、鉢巻だけしめる。

たすき……赤 十文字にあやどる。長さ二・四メ

ートル 巾二四〜三〇センチメ

ートル

脚絆……黒

腕貫……棒持つ者は黒 鎌持つ者は空色

草鞋……草履を代用するが、他所行きの場合は必ず草鞋を用いる。

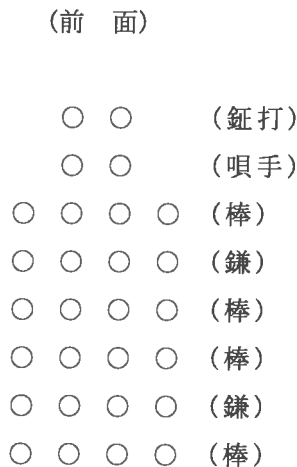
折編笠……唄手がかぶる。造花をつける。

これらの器具は、地区婦人会より寄贈したこともあるが、現在は個人持ちである。

(2) 踊組の編成

踊組は二四名の踊手と二名の唄手、鉦打ち二名から編成する。

棒踊隊形図



地区では、どの家でも二、三男は他に出て働き、長男のみが残るため、旭会員から二四名を出すためには苦勞も多く、不足した場合は、日之出会員から補充する。従つて選別の余地などなく、会員は、それぞれ責任を感じて技を励むので、団結も自然に固くなる。年に一度の行事であるから、技になれてはいても、約三ヶ月は練習を積むことになっている。

踊の隊形は四列縦隊で各列六名ずつになる。図のように踊手の前に二名の唄手が向い合つて並び、その後には鉦打ちの二名が位置する。この四名は年長で技の優れた人達である。

踊手二四名のうち、八名が鎌、(後半は木太刀に変る)を持ち、その他は長さ一・五メートルの棒を持つ。唄手も同じ棒を持つが、これは地をついて拍子をとるためである。

(3) 踊日の経過

この日は先ず神祠に甘酒をささげて神職の祭りがあり踊に移る。

公民館脇の大明神、川の上水神、深川の水神と順次奉納されるが、両水神の距離は、八〇〇メートルほどありこの三ヶ所、合わせて二時間を要し、六時に終ることになる。

最近では農村にも生活改善の考え方が普及し、従来三日間にわたつたこの行事を一日ですませることにになり、踊が終ると引き続き宿元で酒宴となる。

この酒宴には、各戸から男子が一名ずつ出席するが、以前は、紋付羽織に袴着用であった。この席場で、くじ引きが行われ、次年度の宿元と六社代参の人が決まる。

この代参は、収穫感謝のために、地区三字の代表三名ずつが一組になつて収穫終了後に参拝する役である。この六社は、尾鈴・宇納間・児原稻荷(こばるいなり)・鶉戸・楨原・霧島である。

この人たちは、終戦後世相がおちつくにつれて妻女を伴うようになったのは、ほほ笑ましい話である。

この代参の習慣は、高鍋藩の記録、「本藩実録」を見ると各郷に古くから行われていたのであるが、他では、ほとんど失われている現在、この地区がよく代参を維持しているのも棒踊が持ち続けられている支柱のひとつと思われる。

以上は、一日に短縮された現在の行事の経過であるが、以前は三日間にわたる地区最大の行事であった。

その概要を述べると

第一日は、三ヶ所で踊をすませると、宿元で酒宴となる。

くじ引きは、焼酎の出る前に行われる。昔は大酒であったらしく呑めない者は強いられて身体をこわした者もあつたという話が残っている。

二日目は、女子どもの日で棒踊のあと甘酒がふるまわれる。

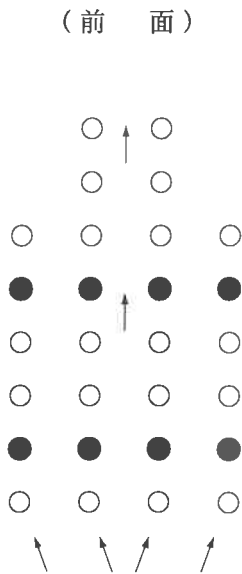
三日目は「ならし成就。」といって踊組に対する慰勞で、やはり納めの踊があつた後、焼酎の馳走となる。これは公民館ができてからは、そこで行われる。

(4) 舞踊の形式

次の六段階に分れる。

- ① 引出し
- ② もじり
- ③ 立棒
- ④ 鎌
- ⑤ 木太刀
- ⑥ 引込み

「引出し」は、一群になつて集合している踊組が次の図のように踊の隊形に展開することである。



このとき鉦打ち、唄手の四名は二列の先頭に立ち、鉦打ちは、鉦を鳴らしながら行進し、踊手が三足四足と鉦の調子に合わせて定位置に達すると踊手はそのまま停止するが、鉦は依然打ち鳴らし、左右両側が定位置に達するまで続ける。全体の形が定まると鉦打ち、唄手の四名は、それぞれの位置に移り、廻れ右をして踊隊と向き合い、「引き出し」、は終了する。

「もじり」……棒者が打ち合うのを主技とするもの

「立棒」……棒を高く立てる技を主とし

「鎌」……鎖鎌の変化したものといわれ、鎌の動作を主技とし

「木太刀」……鎌を小太刀に取りかえて演技する。

「引き込み」……隊形を変えて、次の演技場へ移動するために二列縦隊の行進に移る。この場合、唄手、鉦打ちは、引き出しのときと同様に先頭に立つがそれに続くのは、左右両端の列で、最初に入場した中央の列はその後になる。

出発の際は門口で、二、三棒の打合いをし、行進をはじめ。

この行進中、鉦は絶えず打ち鳴らされる。

(5) 棒踊唄

踊の伴奏の鉦とともに、唄は踊手の気合いを高めるために、最も大切なものであるが、文句は次のように極めて簡単なものである。

この唄は勝ちいくさのとき歌ったものだといわれるように、はやしは、すこぶる陽気である。このはやしによって簡単な文句が生色をおびてくる。

文句は

- ① 嫁女は眼もと
- ② 霧島松は
- ③ 月夜に抱かれて寝たが
- ④ しのめ竹は
- ⑤ おせろの山は
- ⑥ 焼野のきじは

以上のとおりであるが、ここに一例として「嫁女は眼もと」、に、はやしを入れて記録してみると次のようになる。

よおめえ じようほほ おははははは

棒子囃子「サアサア サアサア。」

やめもとおは ええやらやれ よめじよは
眼へえへももおおと やそれはよおほ

ほれええええ なさまあは

棒子囃子「ソレワ ソイソイ。」

右の唄にあわせて踊るが、棒踊は、動作が、活発なので真冬でも汗ばむほどであり、踊手二四名の気持ちがつたり合うことが最も大切なことである。

6 むすび

棒踊は、各地にいろいろあるが、鴨野の棒踊の特色ということになるが、他との比較を重ねなければ、いいきれないが、紙面の都合もあり、それはできかねるので、おおまかにいえば、その地の民俗と深くとけ合っていること、さらに地区居住者の総意に深く根ざしていることにあるようである。

そのため踊の永続性に疑念がない。それでも地区の古老達は、かがみ方、腰のおとし方の不足などを挙げて気合がたりないと戒めているが、地区内の行事であるだけに、安易にならないように注意をはらっている。

それには、従来神武大祭、都井岬、霧島高千穂峰頂上、別府等に出演したように、機会があれば他出し演技をするのもよいと思われる。

終りに以上の資料は、地区の年長者、柄本松雄・森栄・

黒水国太郎・柄本静・森耕造諸氏より与えられたものである。

今まで述べてきたこの資料は、昭和三四年三月刊行宮崎県教育委員会編「日向の民俗芸能 第一輯」に記述された、安田尚義先生記「鳴野の棒踊り」を転写したものである。

さらに、この資料が発表されて一七年を経過しているので、昭和五年二月〜三月に森栄氏に全資料の検討をお願いし、棒踊りの由来の項で伝説の外に、さらに森氏の一説を加えたものである。

またこの棒踊りは、高鍋町民大会、老人福祉大会、新田原自衛隊、高鍋護国神社遺族慰安のため奉納、持田古墳祭、高鍋東小、同西小で公開、さらに蚊口、鶯戸神社祭に奉納、県文化祭と県民俗芸能発表会で演技するなど、かがやかしい業績を残していることを付加し、郷土の誇りであるこの無形文化財が永久に続けられ、ますます発展することを願うものである。

高鍋の盆踊音頭

□ 盆 踊

1 古記録に見られる高鍋踊

高鍋地方の盆踊はいつ頃始まったか明らかでないが、本藩実録巻之六、正徳五年（一七一五）に、一〇月一三日、両殿様へ、大目付以上より、蚊口踊、茂広毛にて御覧に入る。

という記事がある。第四代藩主種政公と第五代種弘公との父子の両殿様に、大目付以上の者（家老、用人、奉行大目付）が相談し合つて、お慰みのために蚊口踊を「もひろげお茶屋」で御覧に入れた、というのである。「もひろげお茶屋」は、中鶴樋渡地区から南東二〇〇メートルくらいの、湿地に突き出た畑の端にあつた殿様のお茶屋である。「蚊口躍」というのが多分蚊口の盆踊なのであろう。その外、

。享保二年（一七一七）八月八日、御近習より中鶴躍御馳走申上ぐる。（第五代種弘公）

。宝暦七年（一七五七）十一月三日、茂広毛に於て、高城、岩淵踊上覧。役人中妻子拝見。役人中勝手次第差し越し候よう仰せ付けらる。（第六代種美公）

。宝暦九年（一七九五）一〇月二二日、小田玄忠より茂広毛に於て御馳走上げ、美々津踊御覧に入る。役人中妻子拝見。（同種美公）

等の記事が見られ、また拾遺本藩実録その他の記録にも類似の記事が見られる。これらの踊というのは盆踊の外、棒踊、白太鼓踊等をも含んでいたかも知れない。旧高鍋藩内各地の踊に、それぞれ特色のあるところから、それぞれの地名をつけて蚊口踊、中鶴踊、岩淵踊等と踊の名称のように呼んだものであろう。

2 盆踊の趣旨及び主催者

踊の起源や変遷は今も知る由もないが、古老の見聞や経験等によつて、大正年間から昭和の初期の盆踊に関係する事柄を記すこととする。もつとも、古老の話は右の時代からはみ出し、極く近年の事もまじっているかもしれない。

盆踊のやり方は所によつて多少異なるが、大同小異である。中鶴地区の場合を例にとつて見ると概ね次の通りである。

旧暦七月一三日と一五日の晩、新精霊様の供養を地区の住民全員で行い、永い間親しく交つた故人の霊を慰めると共に地区の加護を祈り、兼ねて地区の連帯意識と融

和を図る趣旨で行われる。先ず区長は樋渡、屋敷、大峰、後（今島）の四地区の小世話人を召集し、実施方法や、期日、場所、寄附の額等について相談して決定する。世話人は各戸から少量の大豆と少額の寄附を集め、煮豆と駄菓子、若干の焼酎を準備する。若者達は二層のやぐらを組み、新盆の家庭から寄贈の岐阜提灯を下げ、台を組んで太鼓を据える。太鼓は何処の地区でも、鎮守の社に備えつけの太鼓を用いる。当日は、踊場の一隅に供養棚を設け、新精霊様の俗名と戒名を書いたものをまつり、供物と燈明を捧げ、日が暮れると鄭重な供養の後に踊を始める。宵のうちに子供達に駄菓子を配る。新盆の家からは焼酎の寄贈もある。

盆踊は「会」とか、「大会」とかはいわない。「盆踊をやる」、「盆踊がある」といい、「盆踊」が大勢集つて躍り楽しむことを意味している。三味線が鳴り太鼓が響き音頭が始まる。高鍋盆踊音頭独特の節廻しで物語を歌い語る。これを「音頭をとる」といい、音頭をとる人を「音頭とり」という。音頭と三味線と太鼓、それにやぐらのまわりを輪になつて踊る躍り手の手拍子、足拍子、「ソラエコサッサ」という囃子までも一体となつた時、盆踊のふん囲気は盛り上つていく。音頭には「流し」というのがある。「エーエー」と長く声を引きながら声調

を調べていく。その中三味線と太鼓のリズムにうまく乗つて行き始め、物語に移つていくまでを「流し」という。踊り手も初めは手拭、菅笠に顔を隠し、面はゆさからぎこちない踊りも、次第に夜が更け焼酎の酔も廻り、酔うほどに三味線の撥が冴え、音頭も調子づき、太鼓も弾み始めると女装の男性や変装の姿も飛び出すようにもなつていき、時の経つのも忘れるのである。

3 盆踊の日と場所

盆踊の趣旨は地区によつて他の意味のつけ加わるところもある。坂本地区では「水神祭」を兼ねて行い、豊年祈願もする。従つて踊の場所は「水守」の屋敷であつた。旧七月一五日が坂本、一六日は勝利地区という慣例であつた。中鶴は一三日と一五日と二日行われ、場所は大峰の入口の緒方畷行氏の屋敷か、現在巢山氏の住宅の建つている場所かであつた。中鶴と菖蒲池の「水神祭」の踊は主催者が水守で、期日もずっと後の、井手の水止めをする時期に行われた。大正末年から昭和の初頃の宮田川井手の水守は菖蒲池の黒木兼次郎氏と中鶴の黒木国重氏で、水神祭の踊は「水守踊」といい一年交替に両氏の屋敷で行われるのが慣例であつた。踊は盆踊と同じである。鳴野では旧七月二六日の御来光待の夜行われる仕来

りであつた。其の他は旧暦の盆のいずれかの日に行われた。新盆の家庭の依頼があれば其処でも行われた。

盆踊の行われる地区は、鳴野、勝利（菅原神社）、坂本、切原、竹鳩、青木、川田、宮越（立花神社）、道具小路（中間小路）、菖蒲池、中鶴、町（横町、信用金庫附近）、蚊口、市の山、雲雀山は二十日に熊野神社、通称護摩様で行われた。音頭の節廻しも、踊も大同小異で、どここの地区の者でも飛入りで仲間に入ることができた。従つて「音頭とり」「三味線ひき」の名手は他の地区からの招待もあつた。踊の好きな者は太鼓の音に誘われて他の地区まで踊り歩く者もいたのである。

しかし、蚊口では実施方法も期日も、そして音頭も踊も他とは著しく異なつていた。主催者は青年団で、その年二〇歳になつた者だけで計画を立て、寄附を募り、月遅れの盆である八月一三日から一六日まで四日間連続して行う。一三日は東松山称名院円浄寺、通称上の寺で必ず行われ、一四日蚊口西、今の南九州化学工業会社の前、一五日は蚊口下の久保正大氏宅前、一六日は高鍋駅前の四ヶ所で行われる。現在もその通りである。一六日の最終日は踊のコンクールも行われる。また、古来「ジロマ」といわれる特別な踊がある。飛び跳ねる滑稽な踊で、一番の呼び物であり、「ジロマ」が行われないう限り終了に

ならないのである。

4 盆 踊 音 頭

高鍋の盆踊音頭は特色のあるもので、独特の節廻して語っていくいわば口説（くどき）風の語り物である。曲名に「口説」と題した物が多い。「口説」（くどき）とは、謡曲や浄瑠璃で怨言・述懐・懺悔などしめやかに謡う文句ということから、情事を三味線にあわせてあわれそうな節廻しでうたうものをいうのである。高鍋音頭の文句は七七調で、敵討ちや心中物語が語られ、時には勧善懲悪の意を盛り込んだ作がある。口から口に語り伝え語り継いで行くものであるから、伝誦の間に、表現や内容の増補、訂正が行われると共に、言葉の転訛や誤りも必然的に起り、人によつて文句に相当な違いがあり、意味不明の言葉も見かけられる。優れた文学性を求めることは出来ないが、一種の庶民文学と見ることが出来る。

5 音頭の作者と伝誦者

音頭の作者はすべて不明であるが、語り物であるから伝誦者の増補訂正により、原作から成長し変化して来たものである。蚊口上の東松山称名院円浄寺の荣誉和尚の作というのが有る由で、「日州高鍋蚊口の浦に、心中

したとの口説（くどき）がござる」という文句のある作がそれであろうという。しかし、今は伝わらない。栄誉和尚は称名院第一三世の住職である。蚊口の盆踊の第一夜は必ず称名院で行われるのも、これらの因縁によるのではあるまいか。

音頭の文句は語り伝えられるものであるから、後継者がいなくなるか、または記憶している人が亡くなれば絶滅する恐れがある。幸にして伝誦者も僅かながら現存し口述記録や録音テープも保存されている。伝誦者、口述記録を次に書きしるして置く。

(1) 永友今朝十翁。坂本生。明治三〇年八月二日生。口述曲五曲。那須与一。平佐くどき。お民半蔵。おいら十助。鈴木主水。昭和四六年一月六日記録。

(2) 故永友多治衛門氏口述。蚊口の人。昭和一九年一月記録。永友勲氏所蔵。記録三曲。富吉音頭。悲恋ひえつき口説。亀山くどき。

(3) 故岩村慥爾氏記録。中鶴の蓑毛光政翁、道具小路の橋佐太郎翁、岡部義春翁の口述記録を高鍋郷友会報昭和二九年一月号より同三二年八月号まで。及び明倫会報同三三年三月号と八月号に登載。一三曲。那須与一。平佐くどき。おいら十助。富吉音頭。おどまりおさよ（児湯郡三納の事件）。鈴木主水。炭焼小五郎。お蝶口説。梅次郎小富士。山崎さんざ。お艶くどき。おしおかめまつ。いろは口説。

□ 高鍋盆踊音頭集

1 那須与一 永友今朝十翁口述

国はしもおさしもづけの国 那須の与一という侍は背は小兵に御座候えど 積もる御年や十九となりた。のぼせつめたるところはいづこ 四国讃岐の屋島が磯にや平家源氏の戦ござる。手者と手者との戦なれば どつちへ勝負がつこかは知れぬ。九郎判官あれごらんじて 軍大将の与一を呼べと 与一御用と仰せがござる。与一ありゆ見よ沖なる船よ 艦に立てたる扇の的よ あれを一矢で射ち取れ与一。言えば与一はしばしの思案 主の仰せに背きはならず 畏まったとその場を下る。与一その日のいで装束は 小さい兜に鍬形うたせ 駒は奥州坂東育ち あけて六歳山鳥鹿毛の 金の鐙に虎毛のあおり そろりそろりと駒追いかける。ちようどその時台風であれば 扇の要がさらりと知れず そこで与一は祈誓をかける。南無や八幡那須大明神 石の燈籠百八む燈籠 金の燈籠百八む燈籠 札にや神楽も舞いあげます。祈誓かくれば灼な神よ 風もやわらぎ波静まりて 扇の要がさらりと知れる。そこで与一はうち喜んで 駒にまたがり波打際を しんずしんずと駒追いかける。弓を片手に

矢をば天に しばし間は狙んでいたが 一つのひまにか
その矢を放つ。放すその矢は扇の要 要どころをふつつ
と射切る。射切るその矢は海はらはらと 沖の平家がふ
なばたたたく 源氏方では鞍下ならず。与一はまれは数
多けれど こんなほまれは今度がはじめ。

(註) 岩村慥爾氏が収録している「那須与一」は、も
つと詳しく体裁が整っていて、増補がなされてい
るようだ。それによって冗漫さも感じられる。こ
れよりは新しい形と思われる。

2 富吉音頭

蚊口 故永友多治衛門翁口述

蚊口盆踊音頭であり、節廻しは蚊口独特のも
のであるが文句は他の地区のものとはほとんど
同じである。この曲だけは「音頭」をつけて
呼ぶことも中鶴地区と同じである。

さてそれよりも富吉は 西は九州薩摩潟 東は津軽蝦
夷が島 南は紀の路熊野浦 北は秋田で佐渡が島 み山
み山の奥までも たとえば野に伏し山に伏し 如何なる
難儀に会うとても いづくを当に白さぎの どじょう尋
ぬる心地して 国々尋ね廻れども 思うあだに出会わざ
れば 此処にしばらく足を止め ここな日本にかくれ
はないか 浅草寺の観音様に 七日の間の断食ごもり敵

甚内世に居るならば 慈悲にありかを教えて給え 泣く
泣く祈るぞ殊勝なる。七日晩する夜の明け方に ああら
不思議や御利生がござる。そちが尋ぬる彼の敵こそ 江
戸に居るぞと知らせがあれば はつと目覚ましこは有難
や うがいちようずで礼拝をする。すぐに吉原梅若塚に
詣でつつ 両国橋に出て見れば 明日は亡父の御命日良
念仏の回向院 須崎辯天八幡町の 揚屋揚屋を細かに尋
ね 堺町とや数万の群集 芝に神明かの増上寺 切通し
より品川に出て 目黒不動と名祐天の 四谷赤坂番町通
り 比叡山より東叡山の 神田八島の大根畑 望み有る
身の日暮里の里。かほどに心つくせども 思う敵に出会
わざる。よもや仏にうそはなかる。思いついたはかの煙
草売。裏屋々々を細かに尋ね 或る日おしろい榎木の町
に 煙草々々と声かけられて ずつとは入って様子を見
れば これぞ尋ぬる敵でござる。天の与えか天命なるか
吾が生国を打明けて 語り聞かずかの富吉に。知らぬ
ふりして心の内は 大慈大悲の御利生受けて 事をばん
まで委しく尋ね いとまごいして宿屋へ帰る。すぐにそ
の日と早やなりければ 兼ねて用意の白むくを着て 腰
に手ぬぐい重太の太刀 目くぎをしめて落し差し。父の
戒名首に下げ 胸を合羽で人目をつつみ そろりそろり
と宿屋を立てば 常に変りし支度であると 行き来の人

皆氣を付くる。行けば程なくお城の御門 茶屋の床ぎに腰打かけて 御殿下りを待ちにける。八つの太鼓も早やなりければ 上下美々じくじゃめき来る。それと見るなり大音あげて 如何に甚内見覚えあるか そちが殺せし庄造の倅 今日とは亡父の命日なるぞ 父のゆずりの此の刀 受けて見よやと抜きはなつ。云えば甚内えせ笑ひ ああらやさしや百姓め 助太刀あらば何人も 一同掛れというけれど 助太刀いらぬと富吉は 互いに太刀を抜き合わせ 手者と手者との切結び えいえいえいの声を掛け しばしの程は居たりしが 勝負半ばと見えし頃 運の尽きかや彼の甚内は 袴の裾につまづいた たじたじたとするところ すき間もやらじと飛び込んで右の腕を切落す。切られて甚内倒れ伏す。取つて押えて首かき落し 父の位牌を取出し 首を供えて遙かに下りさぞや草葉の父上様よ 是にて恨み晴らされよ。生きたる人という如く 嬉し涙に暮れければ 見入る人々諸見物 一度にどつと声を揚げ ほめそやすこそ道理なれ。

(おわり)

「亀山くどき」という曲があるが、一一葉だけ残り、兄弟で父の仇討に出るが、兄は返り打ちになつてしまふ。そんなところに異母弟も母に仇の似顔絵を見せられて、兄達と力を合せようとする。というところまででその後

が失われている。文句を省略する。

3 炭焼小五郎

丸の長者のことを唄つたもので目出度い場合に歌われる。家建ての場合には一番に歌われる。

丸の長者の由来を聞けば 元は炭焼小五郎殿よ。白杵豊後の三重内山で 藁で髪結うた炭焼小五郎。都内なる大大納言 大納言なる玉代の姫は 拾い拾うた拾い子なれど 広い都に添う夫がない。夫のないのがふびんと思ひ 男頼みの上明神に 七日七夜の誓願をこめて 七日晩する夜の明け方に あらや不思議や御利生が下れた。うがい手水でわが身を清め じたいどうじに礼拝をする。われが一代連れ添う夫は 白杵豊後の三重内山で 藁で髪結うた炭焼小五郎 これが一代連れ添う夫よ。下り豊後を尋ねてくりやれ。そこで姫君うち喜んで 野越え山越え谷おど越えて 小五郎やかたも早や尋ねつけ 内に御座んすか小五郎様よ。誰かどなたか何処の方か 寄りて茶を召せお煙草上れ。お茶も煙草も所望ではないが あなた一代連添う夫よ。言えば小五郎もうち驚いて 一人人口さえ食えない暮し 二人口との覚えはないが。言えば姫君カラリと笑う。命ばかりにや氣遣いするな。姫の

からだにや四十兩の小判 町に行つて来てよね買うてござれ。よねがわからにや米買うてござれ。紙に包んで小五郎に渡す。小五郎受取り袂に入れて たんだ行きやまた行くなる川の 川のある瀬に鴛鴦むすびどり一羽。おしが一羽に小鴨が三羽。あれを打取り姫みやげせん。おしを目当てに小判を投ぐる。おしは舞い立つ小判は沈む。そこで小五郎は思案をなさる。行こか戻るかどうしよかこしよかどうで一度は帰らにや済まぬ。内に歸りて姫には語る。姫は聞くより齒をかみ鳴らし あれは日本の鳥目なるぞ。石と小判がわからにや済まぬ。言えば小五郎カラリと笑う。あれが日本の鳥目なるか。あれが日本の鳥目なればわしが炭焼く谷川筋にや あんな小石は数多いもの。誠にならずは連れだち見ろか 夫婦連にて宝の山に 姫は見るより早や名をつくる。もうし見やんせ小五郎様よ。向うに見ゆるが大判小判。こちらに見ゆるが白金黄金。炭のごとしてだつをもつくり 高瀬舟にて早や積み下す。千朶ちだ万朶の金取り寄する。長者長者と数多けれど 丸の長者は小五郎が一人。

(註) 後の文句がない。小五郎はなりも振りも構わず、欲も得もない。炭を町に持ち出して金は取らずに米と代えた。炭だつの中には日々小判が入っていた。炭の買い手が多かった。炭は櫛しらみだけ焼いた。焼けば天から

金が降つた。姫は醜女であつたが 豊後へ行く途中で顔を洗つたら美人になつたという。

4 おしおかめまつ 道具小路 橋佐太郎翁筆録

国は筑前遠賀の町よ。遠賀町なる叔母上様よ。前に立つのはおしおでないの 後に立つのはかめいでないの。足袋やはだしのそのなり姿 委細語りやれ兄弟のもの。言えばかめまつ語るとすれば それをおしおが早や押し止めて そうでござらぬ叔母上様よ。言えば叔母上申さることに 先は暫く逗留とちう致せ。言えば兄弟うち喜んで或る日兄弟申することに 笈おびのこしらえ叔母上頼む。父のためとや先祖のために 四国西国回らんものと そこで叔母上申さることに 笈おびのこしらえしてやるほどに 先は暫く逗留致せ。下に紫檀黒たん唐木をよせて 大工木挽ひきを早や呼寄せて 笈おびのこしらえ早や取りかかる。七日経つのはこりや早いもの かめい笈おび六尺二寸 おしお笈おび三尺二寸 前の飾りは金銀づくめ 仕立上げたは見事なものよ。さあさこれよりめぐらんものと 日にち調べて旅立ちなさる。まず一番に四国が望み 舟に頼んで四国に渡る。そこで叔母上申さることに 四国西国回りにたならば 早やばや帰りやれ 兄弟のもの。舟は出て行く帆かけて走る。叔母は岡から手で招く。おしおかめ

いは舟より招く。そこで二人は四国に上る。四国八十八ヶ所早やうち回る。四国しまえば信濃が望み 舟に頼んで海を越える。渡り上るが兄弟のもの 越すに越されぬ大井の川よ。浮きつ浮かれつ大井の川よ。おしお流るりやかめいがとどめ かめい流るりやおしおが止め 渡り上るが兄弟のもの。そこで二人が仕度をなさる。先ず一番の茶屋にと行けば 茶屋の亭主はそれ見るよりも 店の草鞋を早や取り出だし、お踏みなされと早やさし出す。それを二人は押頂いて、次の茶屋にと立ち寄れば 手ふき手のごい差上げましよと 店の手のごい早や差出す。これも二人は押頂いて 三番茶屋にと立寄れば さても奇麗なお六部様よ。さては夫婦か兄弟連れか 歳はいくつでその名は何か。言えばかめまつ申することにや わしがかめまつあの娘がおしお わしが十八あの娘が十五言えば亭主もあきれてござる。わしに子供が兄弟ござる歳も同じでその名も一つ きつい瘡瘡に病みつきました 今日に至るが七日のたいや。お宿上げますお泊りなされ。なれど亀松行かんとすれば それをおしおが早やおし止め 六十六部のはやだちというは 晩の七つに宿をも取りて 朝の五つに旅立つものよ。叔母上様より言われし言葉。言えば亀松仕様のなさに わらじ脚絆の紐をも解いて 足をすすいで内へと上る。かめい笈仏あの床の前

おしお笈仏みたまの前に、飾り立てたは見事なものよ。そこで二人は回向を流し み霊祭を静々なさる。二日三日の逗留のうちに すでにおしおが病気にかかる。おしおあらあら瘡そが見ゆる。そこで亭主が申することにやとおていこの娘は病み抜きならぬ この娘病み抜きや枯木に花よ。云えば亀松なおせきあげて 医者薬を一口飲めよ。水や薬に不足はないが 連れて帰るよ遠賀の町に。言えばおしおが申することに 川を流れし早瀬の水が、二度と所に帰ると言うても すでにおしおが申すること、わしが笈仏あの引出しに 大判小判で三百両入れてあるから分ちてたまへ。これな百両叔母にも上げて、わしが形見と言うてたまえ。中の百両わしが入目に頼む。残る百両お寺に上げて 先祖代々仏のために。言えば亀松なおせき上げて 水や薬を一口飲めよ。秋の稲妻川辺の虫 ふらりふらりと居眠りなさる。かめい嘆きは世に限りなし。隣近所で皆うち集まって なんぼ泣いても嘆いたとても 死んだおしおが帰りはすまい。野辺の送りをしてやる程に 旗や天蓋竜辰までも 風になびかせ見事な葬礼。そこでかめいは仏の供養。七日経ちやまたふた七日。そうこうする内四十九日 み霊まつりを早済まし すでに亀松旅立ちなさる。

(おわり)

5 いろは口説

- (い) いとけなき世は愛して通れ。
- (ろ) 老を敬い無礼をするな。
- (は) 腹が立つとも皆までいうな。
- (に) 恨み受くるもわが心から。
- (ほ) ほまれもらうも自慢をするな。
- (へ) 隔てなきよに交わりなせよ。
- (と) 隣近所に無礼をするな。
- (ち) 近き仲には又かし(加勢)をせよ。
- (り) 理屈あるとも皆まで言うな。
- (ぬ) 盗みする身は大事が起る。
- (る) 流浪人は助けて通せ。
- (を) お国のおきてを大事に思え。
- (わ) 若い間のその道々は。
- (か) かようなものじやと言われぬように。
- (よ) 善きも悪しきも人事いうな。
- (た、れ) 不明。
- (そ) 粗略者じやと言われぬように。
- (つ、ね) 常の身持を大事に思え。
- (な) 何が無いとて身を怨むなよ。
- (ら) 楽な身すぎは一人もないが。
- (む) 報い報いて返ぶくするな。

- (う) 恨み受くるもわが心から。
 - (ゐ) 今の難儀を思えば未だ。
 - (の) 後の世までも笑われん。
 - (お、く、や、ま、ま、け、ふ、こ、え、て、あ) 不明
 - (さ) 先の代までも名は残る。
 - (き、ゆ) 不明
 - (め) めった無性にどん欲するな。
 - (み、し、ゑ) 不明
 - (ひ) ひがみ心をつつしむものよ。
 - (も) 不明
 - (せ) せめてこの世にあるその内に。
 - (ず) 末の難儀を思えばまだだ。
- (おわり)

6 おどまりおさよ (児湯郡三納の事件)

国を申せば佐土原領の 四海波風静かな春に 雨も降らぬに三納の笠よ。三納は吉田(三納の地名)の名は長衛門。小さい時に父にぞ離れ 母を一人育みかねて 山を像り商売をする。上り下りの尾泊村(東米良)に 千丈院とて社院がござる。その娘に名はおさよとて 歳は一八尾を振り袖の 手物縫針お機はたの道は 人にすぐれて機活な生れ。それに長衛が心をかけて 何時ぞ何時ぞと思ひし折に そこに長衛が小宿を取りて 宿は取りた

がこの屋は嬉し。夜中九つ早やなりければ 一重障子をサラリと開けて おさよが寝間に忍び込み 両手取りてはこれおさよ殿 おさよおさよと小声で起す。わしはあなたに無心がござる 無心ながらも大事な事よ。人に言やるな話しやるな。わしはあなたに首たけ背たけ 思いまするぞのうおさよ殿。言えばおさよは顔ふり上げて誰かともたら長衛門様か あなた日本の黒雲がかり わたしや両親まだ存じます。いろの道ならお許したまえ。外の用なら如何様な用でも 聞いて上げます長衛門様よ。言えば、長衛門腹立て顔で 何をいやるかのおさよ殿人に大事を語らせおいて 許せ言葉はまだどう欲な。沖にちらちら大船さえも 港見てこそ船をも入れる あなた見てこそ言葉もかける。言えばおさよも理にこめられて 一夜二夜の契りはいやよ。この世ばかりかまだ先の世も一生添うとの証文書きやれ。言えば長衛もうち喜んで 硯取り出し墨すり流し 血書が三枚請け書が五枚書いておさよにしたと預け 直ぐに翌日み山に登る。み山登りしその後々で 血書をかかせば小歌もできる。小歌歌うもおさよと長衛。茶呑み話もおさよと長衛。それを両親早や聞きつけて 両の親様意見をなさる。そこで長衛はみ山を下る。うちにやござんすのうおさよ殿。誰かどなたか長衛門様か あなた帰りを待ち兼ねました。

あなたみ山に登りし後で 両の親から意見をなさる。連れて逃げるか心中をするか 二つ一つにのうして給え。言えば長衛も思案をなさる。連れて逃げるはいと易けれど国にや端ばし番所がござる。関所番所で留めらりよりも それを越すより心中がましよ。やがて後の卒塔婆そとばのかげで ござを引つ敷き酒盛なさる。長衛飲んではおさよにさして おさよ飲んでは長衛にさして さしつさされつさん酒盛よ。さしつさされつ三遍目には 東は白む横雲の 夜明鳥もガオガオと鳴く 藪の小鳥もちよちよと鳴く。さあさ殺しやれ長衛門様よ。言えば長衛もそれ聞くよりも 二尺一寸すらりと抜いて そこよこよと刃をあつる。抜いた刀も鞘さやにぞ納め 主のよういきりよよいものに どこぞ刃が当てりやりよものか 言えばおさよも力を添えて 親の敵のその末々と 思うて私を殺して給え。言えば長衛もそれ聞くよりも 二尺一寸すらりと抜いて おさよ抱きしめ留さし止める。死んだおさよに腰うちかけて そこで長衛は歌詠みをする。今の若い衆同志朋輩よ。色を召すなら浅黄にざつと、紺に召しやまた皆この通り。西を向いては南無阿弥陀仏。東向いては南無釈迦如来。先の如来で添わして給え。返す刀でわが身の自害。

(おわり)

7 平佐くどき 永友今朝十翁口述

恋の一ぶんねんぶの裏に 若い女が大蛇となりて 花
のお江戸を尋ねて上る。それをどこよと尋ねて聞けば
染めて色よい周防の港。渡り上れば津和野の城下 城下
もとでは侍小路の 佐々木儀兵衛という侍の 末の世を
取る平佐の介は 歳は一八角前髪の 角の前髪中しよん
ぼりと 大小差したる袴の着なり 髪の結びぶり 口も
と目もと なんぼ都の絵かきの上手も 平佐姿は似せ書
きやならぬ。似せて書くまい平佐が姿 あまり平佐がき
りよりのよさに 今度津和野の若殿様が お目についた
か小姓にとられ 一の小姓でお江戸に上る。一の小姓と
召し連れなさる。

これに続いて恋めす方は 外にござらぬ呉服屋町の
角のます屋の総領娘。総領娘におぜんというて 年は一
八今咲く花の これが平佐に恋召す方よ。上る平佐に餞
せんと 五尺ての帯中染めわけて 染めも染めかえ七色
八色 合間すきまに歌など書いて 綾で巻き立て錦で伏
せて 風のたよりで平佐に送る。平佐受取り開いてみれ
ば 文の書き様は面白けれど 長なお江戸におもむくか
らは 後へ恋路を残したならば 長なお江戸が勤まりま
せん。とんとならぬとまた書き添えて 綾で巻き立て錦
でふせて、風のたよりでおぜんに送る。おぜん受け取り

開いて見れば これは我が手で我が書いた文。器量自慢
か侍伊達か。またはわたしが町人の子にて 見下げられ
たはあら口惜しや。妾が気はまた細谷川の 丸木橋から
振り落された。落しかかりて落さず置こうか のろいか
かりてのろわず置こうか。

やがてならばに鍛冶屋がござる。そろりそろりと鍛冶
屋を指いて 急ぎや間もなく鍛冶屋にや着いて 内にご
ざるか鍛冶屋の亭主。実はあなたに頼みに来たが 聞い
て下され鍛冶屋の亭主。帽子の無い釘三十五本 お作り
下され鍛冶屋の亭主。言えば鍛冶屋もうち驚いて 親の
代から鍛冶屋はすれど 帽子の無い釘や今度がはじめ。
いえど鍛冶屋も商売なれば 人の頼みは作らにやならぬ。
作り磨いておぜんに渡す。おぜん受取り袂にや入れて
そこでおぜんはわが家に帰り 帰りがけにはお祇園様よ。
ちよいと頼んでのろうて貰おうかと、うちへござるかお
祇園様よ。わたしや氏子のおぜんでござる。妾があなた
に頼みに来たが 聞いて下さいお祇園様よ。江戸にめし
ます彼の平佐をば 日乾し水ぼし相果てるように のろ
い下されお祇園様よ。言えばお祇園神正直に 人をのろ
えば我が身は立たぬ。人をのろうより我が身をのろえ。
言えばおぜんはうち腹立てて 前の唐戸をさらりと開け
て 中の御神をさかてに取りて 頭に三本あばらに二本

つがいつがいにみな打ち通す。打ちてしもうて我が家に
帰る。帰りがけにはわが氏神様に ちよいと頼んでのろ
うて貰おう。うちにござるか氏神様よ。妾は氏子のおぜ
んでござる。江戸にめしますかの平佐をば 日乾し水ば
し相果てるように のろい下され氏神様よ。いえば氏神
神正直に 人をのろうより我が身をのろえ。そこでおぜ
んはうち腹立てて 後に残りし六本釘を 頭に三本あば
らに二本 つがいつがいにみな打ち通す。打ちてしもう
て我が家に帰る。そろりそろりと我が家へ帰る。家に帰
りて二階へ上り 長い煙管にたばこをつめて 二日三日
は唯しよんぼりと。そこでおぜんは病気がひつつき。頭
がうつやら眼がくらみ そこでおぜんは自害をなさる。
もんじしろうという剃刀を 二刃会わせ自害をなさる。
きやつという声此の世の別れ。

あらやおぜんは死んだるそうなが 野辺の送りは誰が
してやるか。村の若い衆寄り集りて 旗や天蓋竜辰まで
も 風になびかせ見事な葬礼。葬礼半ばに不思議の事よ
空が曇りて地が闇となる。そこでおぜんは大蛇となりて
みなとみなどは大蛇の姿。途中途中はおぜんが姿。急ぎ
や程なく平佐が館。平佐館をグルグル巻いて 平佐館を
七巻八巻 平佐平佐と小声で起す。いえば平佐は不思議
に思い 夜の夜中に女の小声。誰かどなたか名を名乗り

やんせ。わしは国許おぜんでござる。いえば平佐は不思
議に思い 国のおぜんは死んだと聞いた。死んだおぜん
が来る筈ないが いえば平佐はあきれてござる。雨戸押
し開け 外見回れば、おぜん姿は大蛇の姿。守り刀をす
らりと抜いて 切れど通せど其の甲斐がない。そこで平
佐は病気にしつき 国許おぜんが恋しくなりて 花のお
江戸を旅立ちなさる。帰りがけには佐原の沖で遂にはか
なくなりにつけり。
(おわり)

8 お民半蔵 永友今朝十翁口述

杵豊後の海辺の郡 こむら申せばかたの村よ かた
たお山は田舎ぢや名所 名所ならこそお医者もござる
お医者その名は玄良さんと 年は五十二でお医者のおさ
り、末の世を取る半蔵の介は 年は十八今咲く花よ こ
れは少しの洒落者なれば 夏はかたびら冬着る袷 衿を
着重ね小袂を揃え 隣り歩きもこぎりやさんと あまり
半蔵が洒落者なれば 広いかたに添う妻がない。妻は
なけれど馴染がござる。馴染女はこの川下の 塩の入り
潮 みゆかしござる。わたり上ればげんりようさんと見
了さんとの山伏ござる。二番娘にお民というて 年は十
八今咲く花ぢや これも同じく洒落者なれば 夏のかた
びら冬着る袷 衿を着重ね小袂を揃え これがかたの

半蔵が馴染　いづぞ今日ぞと思ひし折に　頃は正月二十
八日の　阿弥陀様なる初御用日　村の人々皆参詣す。
お民参れば半蔵も参る。思う所でお民にや出会うて　し
かと手を取りこれお民さん　私やどうでも貴女の事を
山で木の数野で萱の数　千里浜辺の真砂の数よ。何を言
やるか半蔵さんよ　色の道ならお許し呉りやれ。何を言
やるかこれお民さん　わしに大事を語らせおいて　なび
くまいとはそりやどう欲な。お民あれ見よあの山峠　峰
に咲いたる桜の花も　人が通えば花壇の花ぢや。人が通
わにや、あのまますたる。同じ並びに生えたる松も　厭
な風でも吹き来りや靡く。小野の小町も小夜照姫も　千
夜通えば一夜は靡く。言えお民も理に込められて　さ
ほどそなたが思やるなれば、聴いてあげます半蔵様よ。
一夜二夜の契りは厭ぢや。二世も三世もその先の世も
変わりやすまいの誓文書きやれ。いしよう三枚御起請が
五枚　合わせ八枚血書書きなさる。宵の嵐か朝吹く風か
広いかたたをはや吹き廻す。茶飲み話もお民と半蔵　小
歌唄うもお民と半蔵。それをかたたの両親おやが聞き　人の
事かと今朝まぢや思た。聞けば吾が子の半蔵ぢやそなが
さればこれから半蔵にや意見。半蔵半蔵と茶の間にや
呼んで　半蔵よう聞け大事を語る。われは川下山伏の子
と　われはお民と仲良いそなが　暇をやれやれお民にや

暇を、嫁を取らなら中村辺に　一家親類見合わせござる。
鼻も高々お花というて　これを貰たら褒めたる事よ。
言え半蔵うち腹立てて　好かんお花と一代添うて　狭
い胸にて火を焚くよりも　好いたお民と心中がましぢや。
言え半蔵うち腹立てて　親の意見も聞かざる奴は　着
物脱ぎ捨て出て行け半蔵。言え半蔵は武士の子なれば
着物脱ぎ捨て出て行きます。いでていくのはお民が屋
形。たんだ行きやまたお民が屋形。少し窓から窺のぞいて見
れば　花のようなるお民が独り。うちへござるかこれお
民さん。誰かどなたか半蔵さんか　常に変わりて様子が悪
い。わしがふた親意見を受けた。わしが冥土に赴むむくか
らは　あなた残りて縁にも着きやれ。何を言やるか半蔵
さんよ　二世も三世も先の世までも　変わすまいとの誓
文書もんいて　妾むすめも一緒におん伴をする。言え半蔵もうち
喜んで　そこで二人は支度をなさる。人の為には夜明け
のガラス　わしとお前にや冥土のガラス　たんだ行きや
またしも山峠。此処を通れば田の畔あき通り　ころびやしや
んすなこれお民さん。ころびやしんすなこれ半蔵さん。
たんだ行きやまた下山峠。ここがよかるとござうち拵ぢ
銚子盃はや取り出し　半蔵飲んではお民に差いて　お民
飲んで半蔵に差いて　差しつ差されつさん盃で　さあ
さ殺しやれ半蔵さんよ。二尺一寸すらりと抜いて　胸に

突き当て思案をなさる。どうせ刃にかけらりよものか。言えばお民がうち腹立てて 親の敵と申うてやりやれ。そこで半蔵がとどめをさいた。死んだお民に腰うちかけて東向いては南無阿弥陀仏。西を向いては南無釈迦如来。そこで半蔵が歌詠みをする。今の若い衆姐さん方や、色を摺るなら浅黄に召しやれ。紺にすりやまた皆このとお

(おわり)

9 おいろ十助 永友今朝十翁口述

酒の用意が麴の花か たんだ作りてそえかけなさる。それを何処よと詳しく聞けば、国は筑前甘木の町よ。甘木本町名は喜左衛門。喜左衛娘においろと言うて 歳は十八今咲く花よ。花に譬えて申そうなれば 立てば芍薬坐れば牡丹 歩む姿は糸百合の花。あまり良い娘は持つまいものよ。良い娘持ちやまたこの貰い手が 昼は十人夜二十五人 およそつもりて三十五人 三十五人の貰い手なれば、誰にやろうの返答もないが わけて上町十助殿は 年は二十一男の盛り 一で手裏剣二で鎖鎌三に槍法小太刀に柔術 人に勝れて読み書きも上手。これがもとより先口なれば これにやろうと返答なさる。返答すりやまた三十四人 三十四人はそのまま帰る。三十四人の帰りた後で 日にち決めて茶も取り交わす 日にち決

めて祝儀がござる。祝儀ありての三日の晩に 三十四人が寄り集りて おいろしよのみの連判をする。よかるよかろと協議の上で 奥につめたる古四斗樽に これに上酒ずんばと詰めて 口は紙にて立派に張りて 青い緑青で絵を描き散らす。四方隅にはつばめをはませ 青いもりざす白紙つつみ。これをかたぐる二人の人が 首に袈裟かけ荒縄だすき 裾に白足袋紙緒の草履。まだものろいがたり合わざれば 中へ山本連八殿が、三十五六の盛りの男、酒と喧嘩はまま(飯)よりや好きぢや 人の喧嘩も買おそな人よ。樽の言出しもこれ故言出す。頭を剃りはぎ坊主となりて 茶わんたたいて道経読んで そろりそろりと十助が屋形。先にもとだいい白提灯で 旗や天蓋竜辰までも 風になびかせ葬礼の如く そろりそろりと十助が屋形。たんだ行きやまた十助が屋形。十助屋形を三遍回り 三度回りにてチヨエンの口に 内にござるか十助様よ。誰かどなたか若い衆様か。あなた夫婦に祝うての樽 十助その樽見るより早く、木っ葉微塵に踏みくずさんと いえど十助は武士の子なれば 胸で立つ腹心に収め これは神官ありがとござる。今宵この樽開こうなれど 今日が三日の取り込みなれば 何の用意もしておらざれば明日の晩には皆来ておくれ。三十四人はそのまま帰る。三十四人が帰りた後で そこで十助はおい

ろを招き おいろこれ見よこの樽を見よ。俺とわれとの
のろいの樽ぢや。汝は今日ぎり暇遣るからは 家に帰
て縁にぞつきやれ。何を言やるか十助さんよ。昨日や一
昨日今日来たわしを暇と言うては合点がいかぬ。外の田
圃で人声がする 三十四人がまた来たそなと 男だまし
て外にと出して そこでおいろは納戸にはいる。白い木
綿で胸をも巻いて 文字四郎という剃刀で 二刃合わせ
て自害をなさる。キヤツという声此の世の別れ。そこで
十助がうち驚いて 奥の納戸にはや駈けこめば 女房お
いろは自害をなした。これはでかした女房のおいろ お
前一人は先にはやらぬ。三十四人をしのべた後で三途川
原で追いつくからは 三途川原で暫しは待ちやれ。言う
ておいろに蒲団を着せて そこで十助は着の用意。やぜ
ん豆からはら切豆よ。豆腐こんにやく吸物刺身 そこで
肴の用意もできた。三十四人に使を立てる。三十四人が
寄り集りて まだも十助が口説を言えば ざえと出した
る膳わんまでも 木葉微塵に踏み崩そやと よかろよか
ろと三十四人。たんだ行きやまた十助が屋形。家に居り
やるか十助さんよ。誰かどなたか若い衆様か。奥へ奥へ
と高座をきむる。雨戸小戸にや錠かけおろし お取り下
され若い衆様よ。中へ山本連八殿は 今宵此の座は祝の
座ぢやが 無塩肴も有りそなもんぢや。言えは十助納戸

には入り 五尺俎またたにおいろを載せて 無塩肴のお好き
な人は お取り下され若い衆様よ。中に山本連八殿は 人
が肴に食われるもんか。言えは十助はうち腹立てて 何
を言やるか若衆様よ 三十四人は一度にかかれ。たたみ
下へと這いこむ外道も ぞびき出しては唯一刀。庭のか
まどに這いこむ外道も ぞびき出しては唯一刀。三十三
人みな切殺す。後に残りし一人の人は、三十三人しのべ
て(片附けて)おくれ。お前さんには命はやるよ。(蓑
毛光政さん口述のものとは荒筋は同じであるが 色々な
言葉の違いがある。)

(おわり)

10 鈴木主水(岩村慥爾氏が数人から聞いて校訂)
花のお江戸のその傍に さても珍し心中話。所は四谷
の新宿町の 紺ののれんに桔梗ききょうの紋は 音に聞えし橋本
屋とて 数多女郎衆の数有る中に お職女郎の白糸こそ
は、歳は十九で当世育ち 愛嬌よければ皆人さんが 我
も俺もと名指して上る。わけてお客は誰方と聞けば 春
は花咲く青山辺の、鈴木主水という侍は 女房持ちにて
二人の子供 五つ三つはいたずら盛り 二人子供の有る
その中に 今日も明日もと女郎買いばかり。見るに見か
ねて女房のお安。或る日わが夫主水に向い これさわが
夫主水殿よ。わしが女房でやくのぢやないが 子供二人

はだてには持たぬ。十九二十の身ぢやあるまいし 人に見ても意見もいふ年頃に 止めて下され女郎買いはかり 金のなる木は持ちやさんすまい。

どうせきれたる六段目には 連れて逃げるか心中するか 二つ一つの思案と見える。しかし二人の子供がふびん 子供二人とわたしをば、未はどうする主水殿よ。言えば主人は腹立て顔で 何のこしやくな女房の意見己が心で止まないものを 女房位の意見ぢや止まぬ。愚痴なそちより女郎衆が可愛い。それがいやなら子供を連れて そちのお里へ出て行かしゃんせ。愛想ずかしの主水様よ。そこで主水はこやけになりて 出でて行くのが女郎買ひ姿。後でお安は聞く口惜しやと 如何に男の我侷ぢやとて 死んで見しようと思悟はすれど 五つ三つの子に引かされて 死ぬに死なれず歎いて居れば 五つなる子がそばへと寄りて もうし母さんなげ泣かしやんす。気色悪けりやお薬上れ。どこぞ痛くばさすりて上げよ。坊やが泣きます乳くだしやんせ。いえばお安は顔振り上げてどこも痛くて泣くのぢやないが 幼なけれど もよく聞け坊や。余り父様身持ちが悪い。意見致せばこしやくな奴と たぶさつがんでちようちやくなさる。さても残念夫の心 自害しようと思悟はすれど 後に残りし子供がふびん。どうせ女房の意見ぢややまぬ。されば

これから新宿町の 女郎に頼んで意見をしよう、三つなる子を背にと負うて 五つなる子の手を引きまして 出でていくのがさも哀れなる。

行けば程なく新宿町よ。店ののれんは橋本屋とて 見れば表に主水が草履。それと見るより小童を招き わしはこちらの白糸さんに どうぞ会いたい会わしてお呉れ。ハイと小童は二階に上る。これさ姐さん白糸さんよ。何処の女中か知らない方が 何かお前に用ありそうな。会うてやりやんせ白糸さんよ。言えば白糸二階を下りる。わしを尋ねる女中と言うは お前さんかえ何用でござる。言えばお安は初めて会うて わしは青山百人町の、鈴木主水の女房で御座る。毎度主人がお邪魔ぢやそうな。お前見込んで頼みがござる。主水身分は勤めの身分。日々の勤めをおろかにすれば 未は御扶持に離れる程に 二人子供はだてには持たぬ。せめてこの子が十にもなりて上のつとめをするようになれば 昼夜揚げずめなさるとままよ。なおもわたしが去られた後で お前女房になりやんすとも この道理をよく聞き分けて 三度来たなら一度は揚げて 二度は意見で帰してお呉れ。言えば白糸言葉に詰り わしはこうした勤めの身にて 女房持ちとは夢露知らず さぞや憎かるお腹も立とう わしはこれから主水様に 意見しまするお帰りなされ。よろし

う頼むとお安は帰る。後で白糸二階へ上る。遂に白糸主水に向い お前女房が子供を連れて 意見頼みに来ました程に さあさお帰り主水様よ。頼みなりやこそ意見もするが 留めてはならぬお帰りなされ。いえば主水はにっこり笑ひ 家のかかよりお前が可愛い。いえば其の日も居続けなさる。家で哀れはお安が一人。どうぞせ主水は帰りはすまい。知行御扶持のあがつた後で 馬鹿なたわけをいわれるよりも 武士の女房ぢや自害をしようとする二人子供を寝かして置いて 硯取り出し墨すり流し 落ちる涙が硯の水よ。涙とどめて書置き致し 白い木綿でわが身を巻いて 二人子供の寝たのを見れば 可愛い可愛いで子に引かされて 思い切り刃を逆手に持ちて グツと自害の刃の下に ギヤツと言うたが此の世の別れ。二人子供は早や眼が覚めて 三つなる子は乳房に下り五つなる子は背中にすがり これさ母さんのう母さんと幼な心で早や泣くばかり。主水それとは夢にも知らず 女郎屋出で立ちほろほろ酔いで 女房ぢらしの小歌で帰る。

表によりて今帰つたと 子供二人は早やかけ出でて もうし父様お帰りあるか。何故か母さん今日限り 物を言わずに一日を寝る。ほんに今迄いたずらしたが 御意は背かぬのう父様よ。どうぞ詫びして下されましと 聞

いて主水は驚き入りて 間の唐紙さらりと開けて 見ればお安は血潮に染まり わしが心が悪いが故 自害したかよふびんな事よ。涙ながらに二人の子供 膝に抱き上げ可愛やほどに 何も知るまいよう聞け坊や 母はこの世の暇ぢや程に 言えば子供は死骸にすぎり もうし母さん何故死にました。わたし二人はどうしましようかと 嘆く子供を振り捨て置いて 檀那寺へと急いで行きて 戒名貰うてわが家へ帰り 哀れなるかや女房の死骸 薦もに包んで背中に負うて 三つなる子を前にと抱え 五つなる子の手を引きながら 行けばお寺で葬ります。是非もなくなくわが家へ帰り 女房お安の書置き見れば あまりつとめの放らつ故に 扶持も何にも取上げられる。又は門前払いと読みて さても主水も仰天いたし 子供泣くのをそのまま置いて 急ぎ行くのは白糸方へ。さてはお出掛け主水様よ。来たが今宵はお帰りなされ。言えば主水はその物語り えりに懸けたる戒名出して 見せりや白糸手に取り上げて わしが心の悪いが故に お安さんにも自害をさせた。さればこれから三途の川も お安さんこそ手を引きましよと 言えば主水は暫しと止むわしとお前と心中しては お安様への言訳立たぬ。お前死なずに永らえしやんせ。二人子供を成人させて 回向頼むよ主水様よ。いうて白糸一間へ入りて 数多朋輩女

郎衆を招き 譲り物とてくしこうがいを やれば小春は
 不思議に思い これさ姉さんどうした訳よ。今日に限り
 て譲りを出して それにお顔も勝れもしない。いえば白
 糸よく聞け小春 わしは幼き七つの歳に、人に売られて
 今このくるわに 辛いつとめも早や十二年、つとめまし
 たよ主水様に 日頃年頃懇親したが 今度わし故御扶持
 も離れ 又は女房も自害をなさる。それにわたしが永ら
 え居れば お職女郎の意気地が立たぬ。死んで意気地を
 立てねばならぬ。早くそなたも身ままになりて わしが
 為にも香華を頼む。いうて白糸一間へ入りて 口の内に
 てただ一言葉。涙ながらにのうお安さん わたし故にも
 命を捨てて さぞやお前は無念であるが 死出の山路も
 三途の川も 共にわたしが手を引きませうと 南無とい
 う声この世の別れ。数多朋輩皆立ち寄りて 人に情の白
 糸さんが 主水さん故命を捨てた。残り惜しげに朋輩達
 が 別れ惜しみて嘆くも道理。今は主水もせんかたなき
 に 忍びひそかに我が家に帰り 子供二人に譲りを置い
 て 直ぐにそのまま一間に入りて 重ね重ねの身の誤り
 に われとわが身の一生捨つる。子供二人は取残されて
 西も東もわきまえ知らぬ 幼な心は哀れなものと 数多
 心中もあるとはいえど 義理を立てたり意気地を立てて
 心合うたる三人共に 聞くも哀れな話でござる。(おわり)

附 高鍋町蚊口浦鵜戸神宮祭礼木遣り

お宮出

ホラハエー 先ず今日の ヒヤハエー

エー 今日の目出たさよ アーヨイトナ

ホラハエー 今日吉日 ヒヤハエー

エー 吉日日柄もよいが アーヨイトナ

ホラハエー 今日はめでたや ヒヤハエー

エー めでたや鵜戸様の祭 アーヨイト

ナア

ホラハエー 丸に一つの ヒヤハエー

エー 一つの紋所 アーヨイトナア

ホラハエー 蚊口千軒 ヒヤハエー

エー 千軒名の出た町よ鵜戸の大神守り

神 アーヨイトナア

浜下り

ホラハエー 緑松原 ヒヤハエー

エー 松原たどりて行けば沖の彼方に真

帆片帆 アーヨイトナア

ホラハエー 新造作りて ヒヤハエー

エー 作りてうかべて見れば沖のカモメ

の浮き姿 アーヨイトナア

ホラハエー 沖の大船 ヒヤハエー

エー 大船イカリで止まる止めて止まら

ぬ恋の道 アーヨイトナア

ホラハエー
エー
沖の大間の ヒヤハエー

大間の中将姫よ アーヨイトナア

ホラハエー
エー
沖のカモメに ヒヤハエー

カモメに潮時間えば私や立つ鳥

波に問れえ アーヨイトナア

ホラハエー
エー
あれを見たかよ ヒヤハエー

見たかよ白帆が招くアーヨイトナ

御里回りホラハエー
エー
恋にこがれて ヒヤハエー

こがれて泣くセミよりも泣かぬホ

ホラハエー
エー
タルが身をこがす アーヨイトナ

目出たいものは ヒヤハエー

ホラハエー
エー
物は破れカヤ鶴かと思たら亀が出

た アーヨイトナア

ホラハエー
エー
目出たいものは ヒヤハエー

物はソバの種 アーヨイトナア

ホラハエー
エー
竹に雀は ヒヤハエー

雀は品良くとまる アーヨイトナ

ホラハエー
エー
蚊口名物 ヒヤハエー

名所は数ある中にだれがつけたか

ホラハエー
エー
琴引き松 アーヨイトナア

一で橘 ヒヤハエー

エー
夕チバナ二でかきつばた

ホラハエー
エー
三で下り藤 ヒヤハエー

下り藤四で獅子牡丹

ホラハエー
エー
五つ伊山の ヒヤハエー

伊山の千本桜 アーヨイトナア

ホラハエー
エー
六つ紫 ヒヤハエー

紫小袖に染めてアーヨイトナア

ホラハエー
エー
七つ南天 ヒヤハエー

八つ山桜 アーヨイトナア

ホラハエー
エー
十で殿様 ヒヤハエー

殿様ニシンの茶漬アーヨイトナア

ホラハエー
エー
今の調子じゃ ヒヤハエー

調子でつけ声しやんと

お宮入
ホラハエー
エー
安芸の宮島 ヒヤハエー

宮嶋廻れば七里 浦は七浦 七え

びす
ホラハエー
エー
蚊口良いとこ ヒヤハエー

良いとこ一度はおいで鶴戸の祭の

お宮入り
ホラハエー
エー
お宮入り

お宮入り

お宮入り

お宮入り

お宮入り

ホラハエー 三度廻りて ヒヤハエー
エー 廻りて宮入りたのむ

アーヨイトナア

(おわり)

蚊口浦の鵜戸神社の祭礼は毎年七月十八日であるが、当日がウイークデーである場合は、その前後の十八日に近い土曜、日曜の両日に行われるのが慣例である。お神輿をかつぐ若者達の参加を考へてのことであろうが、いつ頃からそうなたかは明らかでない。

祭礼のお神輿は木遣の歌につれてお宮を出て浜下りをする。その後蚊口の町筋を練りながら回る。これを「お里回り」といい、祭の終りにお宮入りをする。蚊口の人々は故郷を遠く離れていても、この祭と木遣が忘れられないで、はるばる故郷に帰って来る人が多い。町の火産靈神社の祭の木遣もこれを模して作ったともいわれている。

むすび

盆踊音頭全曲の収録はできなかつたが、代表的な十曲を収録し得た。音頭の歌詞には方言や、方言的表現、時には意味不明の語もあるが、できるだけ原形を残すことにつとめた。

音頭の歌詞その他の資料の収集には、多くの方々に積極的に協力して頂いた。特に永友今朝十翁からは歌詞の口述を、猪股松男氏からはその口述の機会を、蓑毛光政翁には歌詞の疑点を正し、盆踊りに関する話をしていただき、永友勲氏から故多治衛門氏の音頭の筆録と、鵜戸神社祭礼の木遣りの歌詞の提供をしていただいた。黒木末光氏からは水神祭の示唆を受けた。殊に故岩村慥爾氏の収集に負うところは極めて多い。ここにしるして深くお礼を申し上げたい。

執筆者及び参画者所属氏名

高鍋町教育委員長	石丸恵守
高鍋町文化財保存調査委員長	石川正雄
文化財保存調査委員	稲田茂二郎
"	岩佐政雄
"	小椋美雄
"	武藤重勝
"	安田尚義
"	大泉篤範
高鍋町社会教育課長	故
課長補佐兼文化財係長	永友忠久
"	本野寛
社会教育係長	矢野博美

編集後記

高鍋町の文化財第三集は「高鍋の無形文化財」の表題の下に高鍋神楽、鳴野棒踊、高鍋盆踊について解説編集しました。

高鍋神楽は東尾湯地区に古くから伝承され神事や神社例祭等に奉納されて民衆に親しまれている神楽で、現在県指定の文化財になっています。関係の各町は特別保存会を結成して多額の経費を負担しその保存顕彰に努力しています。今回の解説は当初、大泉篤範氏が担当されましたが原稿未完成のうちに病没される不幸にあい、稲田茂二郎文化財保存調査委員がこれを継承して完成されたものであります。

鳴野棒踊は鳴野地区の有志の方々によって継承されている貴重な文化財で岩佐政雄委員が県文化財専門委員として活躍された故安田尚義先生の研究資料を基礎に新たにまとめられたものであります。

高鍋盆踊は先年逝去された岩村慥爾先生の残された盆踊音頭の記録等を基礎資料に石川正雄委員が執筆を担当されました。

これらは貴重な文化財ですが資料も文献も乏しく問題点も多く残されている中で、現在までの成果に立って一冊の文献としてまとめ上げられ町民の皆さんは勿論同好の方々にも参考にしていただくことが出来たことは何よりの喜びであります。なお右以外にも切原の鎌踊、兀の下の嫁女踊等今後の研究に待つべきものも少くありません。

文化財保存調査員をはじめ資料収集、執筆編集等にご協力いただいた方々、とりわけて貴重な写真の提供を快諾された高鍋写真クラブのご好意に心から感謝申し上げます。

なお内容、表記等についてお気づきの点は、ぜひご叱正ご連絡を賜わるようお願いいたします。

高鍋町教育長 石丸恵守

高鍋町文化財要覧(第三集)
高鍋の無形文化財

初刊 昭和51年2月28日
再刊 平成15年2月1日

高鍋町大字上江1138番地

発行 高鍋町教育委員会
編集 社会教育課
TEL(0983)23-3326
印刷 熊谷印刷株式会社
高鍋町大字高鍋町624 TEL23-0007

